

統

一

財團法人
統

一團發行

目 次

本 尊 論 (中篇)	聖應院日生
人生と法華經 (其三)	池ノ内三雄
床次遷相を悼む	磯部満事
法華經講話 (第二十二講)	小林一郎
比叡山上宗教教育講習會の記	河合 陟明

○本部團報各地教信 ○寄附團費誌料領收

號月十 年十四第



財團統一團趣意

統一團ハ創立以來實ニ三十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サマル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法恩國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン 又著述出版ニ於テハ大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ執行セント欲ス 其中心ノ事業ヲ學ダレバ

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ 教旨ノ正明 研學ノ潤達 活動ノ旺盛 此等ハ統一團ノ標語ナリ

定ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

本團略則

- ◎目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ講明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開演シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- ◎維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス
- ◎贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス
- ◎正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ繳出セラル、方ヲ正團員トス
- ◎入團 御希望ノ方ハ密所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス
- ◎誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

本尊論

聖應院日生師

宗教の信仰に於て最重要な本尊意識の不透明であることは、何を措いても一番悲嘆すべきことであつて、等しく大曼荼羅を本尊とするとはいひながら其の本體も性質も相状も混亂したり、或は法の字義を實相無相の迷見に解して、甚しきは歴史上の釋尊は既に御入滅だから、滅後は法中心で行かうとする所謂一種の機關説さへ吐くものあるに到つて、私共は最早黙することが出來ないので、先月號からこの日生上人の本尊論を摘出した次第である。幸に道の爲め自佗の偏執を捨て、御精讀して頂きたい。

前回の大要は、佛教の根本教義である本尊の大觀を論じて佛教の本質を誤解せる學者の原惑を指摘し、進んで日蓮聖祖の一大秘法を擧げ妙法の内容に入り、以て本尊意識の研討より順次法本尊の本體を説述して、妙法の法體と本佛の實在光顯の大事を語り、法體の存亡は一に本佛の實在と否とに懸つて居ることを述べられた。

されば法本尊の本體を檢して實相の全體たるを知ると同時に、實相は三千諸法の實在を指すことを認め、而して三千諸法の中に於て、特に佛陀の實在を確め、此佛陀の大慈悲の發動、亦た無始本有にして止息なく、吾人迷者の頭上に其大慈悲の恩寵を下し玉へるもの、是れぞ眞平たる宇宙法界の實相たることを認識すべきなり。

されば妙法の法體とて別のものにはあらず、生佛の關係、生佛の本體其者が妙法の全體にてあるなり則ち十界互具の關係と、十界事常の本體が、妙法の法體なり。聖祖著述の觀心本尊抄は、一面より見れば法本尊の如くにも見へ、他面よりせば人本尊の如くにも見へ、又或點の考察よりせば己心本尊の如くにも見らるるなり。其は三者の實體を審究し、精研し、仔細に之を信念上に消化把住せんとするに至らば、三者の間相倚り相和し、吾人は轉凡成聖、離苦得樂の境界に進むべく結び付けられあるを教へ玉へるに外ならず。他語にて言はゞ妙法と、本佛と、吾人との三者の關係は、離るべからざることを信念せしむるにあり。故に法本尊を解して其實際を極めんか、本佛と吾人との關係を措て遂に其本體を見出す能はず。若し法本尊を解して人本尊を斥け、又は己心本尊を排せんか、其は三種の本尊に就て其何れにも未だ堂奥に達せざる局見のみ。請ふ是より試みに聖祖主唱の人本尊に就て、佛の方面より宗教客體の統一を教へ玉へる眞意を窺はんかな。

人中心の統一論は我宗教義の大本なり、之を聖判に徴するに、其主張極めて明瞭にして聖祖の氣魄今尙躍然潑瀾たるを見る。而るに古今の宗徒此間の教義を講明するに當りて、識見の透明ならざるものあり。吾曹の考察に由れば、法本尊と人本尊との關係に就て、調和の妙旨を領會せざるが爲めに、人本尊の説述に望みて筆端縮するにあらざるなき歟。若し夫れ法中心の統一と、人中心の統一と、人法不二の統一とに於ける案配を悟了せんか、人中心の統一を講明する場合にありては、極力絶對的に人本尊の眞意義を發揮し能ふべく、法中心の統一を窺ふに當りても、尚法を第一位に置かんごせば、到底人中心の統一は成立せざるなり。古來報恩抄の本門の教主釋尊を本尊とすべしとの聖判が、一大疑問として宗學者の間に上下せらるゝ所以のもの、正しく人中心の統一に就て遲疑する傾向あるが故のみ。人本尊と法本尊とは講明の道程に於て、一たびは兩々相容れざるの觀を呈すべし。然れども進で兩者の關係を案配するに至らば、人法一體の妙旨に歸して、茲に佛教本尊論の完結を告ぐるを得べきなり。

人本尊の講明に於ては、佛身論の發達系統より講述するを便宜なりと考ふるものあり、夫れ或は然らん。然れども吾曹の考察に依れば、佛身論の發達系統を追ふて筆を起さんよりは、宇宙論の方面即ち實相論一念三千論の上より研究するを、極めて適當なりと信す。何となれば佛身論は一念三千論の組織中に包容せらるゝが故に、宇宙法界の實相を講明せば、佛身の眞容隨て現はれ來り、人中心の統一論を完成するを得ん。若し單に佛身論發達の道程を辿らんか。三身論の妙致に達して、其論旨を終結せざるべからずして、聖祖唱道の人中心の統一に於ける佛界緣起の大教義、十法界の本主としての佛陀を光顯するに便ならざるを覺ゆ。試みに心を潜めて聖判を審案し見よ。

聖祖が三身論は必ず一念三千論の基礎の上に築かれたるものにして、近代の宗教學者が云ふが如き、佛身論の發達史を辿りたるものにあらず。聖祖が二乗作佛、久遠實成を併舉し來りて後三身論に入るが如きは、吾曹が所謂實相論中に佛身論を置きたるの適例と視るべく、法華經の本文亦方便品の實相論より起て、壽量品の顯本を説けり。而して壽量の顯本は一往之を見れば佛身に於ける顯本なるが如きも、實相論の基礎の上より來れる顯本なるを以て、十法界の顯本を意味す。我々は十法界の衆生なりと云ひ爾前連門の十界の因果を打破りて、本門の十界の因果を説き顯す、乃至眞の十界互具百界千如一念三千なるべし、かふてかへりみれば華嚴經の臺上云々と云へるの類、是れ皆實相論の上に築きたる佛身論たるを證して餘ありと信す。

前々項既述せる法本尊の始めに注意したるが如く、人本尊上に起る原弊は、法身爲本の腐説是れなり。而して法身爲本が本尊論の迷源たる所以は、實相を理的に認むるの結果に外ならず。一相無相の理的實相に向つて法身の名を附したるものなれば、佛身の眞容を誤認せる惑源は取も直さず實相論の誤解

より來れるなり。若し實相論に於て十界事常住の旨致を悟了せんか、法身の認識隨て轉せられ、佛身論の根底に一大變動を來たすは、最も賭易きことならずや。鬼もあれ吾曹は十法界の本主たる佛陀を紹介して人中心の統一を語らんかな。

佛とは即法界なり。宇宙の全體は一大本佛の體内に攝屬せるなり、宇宙法界廣くして且大なるも、十界十如三世間を出でず、此等三千の諸法は、生起の始なく終滅の終なし、生起に非ず滅滅にあらざる、生死の若し退、若し出あることなし、十界三千宛然として古今の別なく今昔の異なし。而して九界も無始の佛界に具し、佛界も無始の九界に備はり、十界互具融足せり(抄開目)。然れば一衆生即十衆生、十衆生即一衆生也(十法)。故に十界の其何れにもあれ本體に就て之を云はゞ、十界三千具足の妙體ならざるなし。佛陀は十界三千の妙悟を有するのみならず、實際に之を活用示現して佛事を實行し玉へり。語を換へて之を言はゞ、一衆生を中心として法界を見れば、法界は一人の法界なり、理論は斯くなるも、一人の法界たるを悟了し、且之を實用に供せるは佛陀に外ならず、佛陀は自己の意思より法界を左右し玉ふ、迷者は法界中の一粟として生々死々せり。

佛は即ち法界なり、一佛を擧ぐるに何物か此に攝せられざるものあらん、佛佛を攝するは言ふを待たず、十界の色心業を束ねて一佛の眞容となす。然れども十界の色心業を分張せんか、佛陀の眞容を認識すること難し。故に佛身を常樂我淨の境界に招へ、普賢色心の妙用として、十界の應現を論ず。而かも實には十界の全體を束ねて自在神通、應用無邊の處即一個の佛陀なり。如來秘密神通之力、體用俱時の大活動者なり。如來には五眼ありと雖ども、實には分張せず、只一眼に約して備さに五用あり、能く五境を照す、獨り佛眼と稱するは、衆流海に入て本の名字を失するが如く、四用なきにはあらざるなり。(止觀三ノ)と云へるが如く、十界の色心業は是れ一個の佛陀なるも、衆流海に入りて本の名字を失するが如く、十界の色心業を束ねて佛陀と呼ぶに外ならず。されば聖判に示して曰く、

法華經ノ壽量品云ク、或説己身或説他身等云云。東方の善德佛、中央の大日如來、十方の諸佛、過去の七佛、三世の諸佛、上行菩薩等、文殊師利、舍利弗等、大梵天王、第六天魔王、釋提桓因王、日天、月天、明星天、北斗七星、二十八宿、五星七星、八萬四千の無量の諸星、阿格羅王、天神、地神、山神、海神、宅神、里神、一切世間の國主とある人、何れか教主釋尊ならざる。天照大神、八幡大菩薩も、其本地は教主釋尊也。例せば釋尊は天の一月、諸佛菩薩等は萬水に浮べる影也。云云(内二十八、日觀)
(女釋迦佛供養抄)

又曰く
爾前之經之人人は、佛之九界之形を現するをば、但佛之不思議の神變と思ひ、佛の身に九界が本よりありて現するとは云はず。云云。(内十三、一代大意抄)

此等聖判の指教に依れば、佛身の眞容は、體用俱時の大活動者たること明白にして、一大本佛の本體と作用とは、佛教經典に顯はれたる佛菩薩諸世天等を總統するのみならず、異教徒異邦人の崇敬を捧ぐる神様達をも包容して餘す所なく、尙ほ國主とある人と云へる意義を擴充せば、人生上社會上に効益を與ふるものは、何人と雖も本佛發動の一部と見做すを許せり。誰か此廣大なる立論に驚歎せざらんや。之を約言せば、佛身の眞容は十界具足の妙體にして、此妙體は體用俱時の大活動者として、同時に十界の色心業を活用して、常に衆生救済の大佛事を經營し玉へり、經に「所作佛事未曾暫廢」と説くもの則ち是れなり。

斯の如く一個の本佛を認識せば、多神散漫たる佛教に於て能く綜合統一の中心を確立し得て、始めて本尊の對象に巧妙なる組織を發見し能ふなり。而して此統一中心の本佛は、果して何れの佛陀に歸すべきかは、是れ亦一個の好論題たるなり。

聖祖は三大理由に基き、壽量品の教主釋尊を以て、統一中心の本主と決判し玉へり。一に曰く歴史上の大因縁。二に曰く諸佛化境の差異。三に曰く釋迦自己の顯本是なり。

歴史上の大因縁とは、吾人の奉戴する佛教は、印度に降誕せる大聖釋迦牟尼佛より開示せられたるものにして、諸宗見解を異にするも、釋迦佛の指教の下に立宗せざるものなく、佛教効果の源泉は一に釋迦佛より流出し來れり。釋迦已外の大日如來より傳法せりと云ふが如きは、全然虛偽の主張に外ならず

然れば此界に降誕し、親しく吾人々類の爲めに偉大なる教化を遺し玉へる史的因縁の上よりするも、釋尊を中心として統一を計るべきは、當然の主張なりと云ふにあり。今一文を引證せん、

釋迦より外に大日如來世に出現して、三部經を説くと云ふ歟。顯を提婆に傳へ、密を龍智に授くる證文何れの經論に出たるぞ。此大妄語は提婆の歎罪にも過ぎ。瞿伽利の誑言にも超へたり。

次に諸佛化境の差異とは、且く述中の所説に依るも、釋迦牟尼佛は此界を領土と定め玉ふ。化城喻品に云く「我釋迦牟尼佛、娑婆國土に於て阿耨菩提を成せり」と。大論九に曰く「十方恒河沙の三千大千世界を名けて一佛世界と爲す、是の中に更に餘佛なし、實には一りの釋迦牟尼佛なり、是の一佛界中常に種々の法門、種々の身、種々の因縁方便を化作して衆生を度す」と。諸佛に各修各行の差異ありとの迷説に依り、願行に隨ひ身を現じ、土を取ることに不同ありとせば、釋迦は正しく此土を取りて出現し玉へり。諸佛は他土の教主にして因縁熟せざるものと云ふべし。然れば此土有縁の釋迦牟尼佛を以て統一の中心と定むるは論無き所ならずや。若し強て他佛に信頼せんか、其は忠孝の倫道にだも合せざる非行なりと云ふにあり。

釋尊を忘れて諸佛を取ることは、例せば阿闍世太子の頻婆娑羅王を殺し、釋尊に背て提婆達多に付きしが如き也。二月十五日は釋尊御入滅の日、乃至十二月十五日も三界慈父の御遠忌也。善導、法然、永觀等の提婆達多に誑されて、阿彌陀佛の日に定め畢ぬ。四月八日は世尊御誕生の日也、藥師

佛に取り畢ぬ。我慈父の忌日を他佛に替るは孝養の者なる歟如何。壽量品に云く、我亦爲世父、爲治狂子故等云云（内九、法華取要抄）

次に釋迦自己の顯本とは、印度伽耶城に降誕せる釋尊が、壽量品を説くに當り、自ら説て言へらく、『皆今の釋迦牟尼佛、釋氏の宮を出て、伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を得たりと謂へり』と。又曰く『然るに善男子、我實に成佛してより已來無量無邊百千萬億那由他劫なり』と。而して釋迦は自己を中心として或説己身佗身、或示己身佗身等の六或の説を掲げ、釋迦自ら諸佛統一の中心たることを宣言せり。故に聖祖判じて曰く、

平等意趣を以て佗佛自佛と同じと云ひ、或は法身平等をもて自佛佗佛同じと云ふ。實には一佛に一切佛の功德を收めず、今法華經は四十餘年の諸經を一經に收めて、十方世界の三身圓滿の諸佛をあつめて、釋迦一佛の分身の諸佛と談す云云（内十一、明）

大日經、金剛頂經等八葉九尊三十七尊等、大日如來の化身とは見ゆれども、其化身三身圓滿の古佛にあらず、大品經の千佛、阿彌陀經の六方の諸佛未だ來集の佛にあらず、大集經の來集の佛又分身ならず、金光明經の四方の四佛は化身なり。惣じて一切經の中に各修各行の三身圓滿の諸佛を集めて我分身とはとかれず。（今此寶塔品は）これ壽量品の遠序なり。始成四十餘年の釋尊が、一劫十劫等已前の諸佛を集めて分身ととかる。さすが平等意趣にもにすをびたゞしく驚かしの云云（内三、開目抄下）

人生と法華經 (其三)

池ノ内三雄

懺悔篇 第一

四、法華經と私

母性愛の力といふものは實に偉大なものである。私は最初吾が子故の心配から一層と老ひ衰へた哀れな私の母に對してその内心に於ては宗教を否定しながら、この大不孝の罪のせめてものお詫びとして、慰めてやらうといふ氣持が起つて來たので、私を改心させやうとして、日蓮聖人に歸依して、一生懸命に南無妙法蓮華經と題目を唱へつゝ信心をはじめた私の母の爲めに、私は日蓮聖人の傳記や法華經等を解説してやつて、そして安心させて死なせたいと考へついたので、それ等に關しての本を刑務所の教務から借り受けて、手あたり次第に讀み出したのであつた。ところが、私ははじめて日蓮大聖人の偉大な思想、それから釋尊の眞實の宗教に就て知ることが出來たのであつた。私も今まで少しは佛教やキリスト教等の教典を見たことはあつたが、しかしこの法華經壽量品の

中の良醫と治子の譬諭の如く、私の胸を強く打ち、心にしみじみと感じたことは未だ會つてなかつた。即ちその譬諭といふのは、

「譬へば良醫の智慧聰達にして、明に方藥に練し、善く衆病を治す。其人諸の子息多し、若は十、二十、乃至百數なり、事の縁あるを以て、遠く餘國に至りぬ。諸の子、後に佗の毒藥を飲む、藥發して悶亂して地に宛轉す。是時に其父還り來つて、家に歸りぬ。諸の子、毒を飲んで或は本心を失へる、或は失はざる者あり、遂に其父を見て、皆大に歡喜し拜跪して問訊すらく、善く安穩に歸りたまへり、我等愚癡にして誤つて毒藥を服せり。願くは救療せられて更に壽命を賜へと。父、子等の苦惱することは是の如くなるを見て、諸の經方に依つて、好き藥草の色香美味皆悉く具足せるを求めて、摻和合して子に與へて服せしむ。而て是の言を作く、此の大良藥は色香美味皆悉く具足せり。汝等服すべし、速に苦惱を除いて、復諸の患なけん。其の諸の

子の中に、心を失はざる者は、此の良薬の色香俱に好きを見て即便之を服するに、病盡く除り愈えぬ。餘の心を失へる者は、其父の來れるを見て亦歡喜し問訊して、病を治せんことを求索と雖も然も其藥を與ふるに、而も肯て服せず、所以は何ん、毒氣深く入つて、本心を失へるが故に、此の好き色香ある藥に於て、美からずと謂へり。父是の念を作し、此の子怒むべし、毒に中られて心皆顛倒せり。我を見て喜んで治療を求むと雖も、是の如き好き藥を而も肯て服せず、我今當に方便を設けて此の藥を服せしむべし、即ち是言を作さく、汝等當に知るべし、我今衰老して、死の時已に至りぬ。是の好き良藥を、今留めて此に在く、汝取つて服すべし、差じと憂ふること勿れと。是の教を作し已つて、復陀國に至り、使を遣はして還つて告ぐ、汝が父已に死しぬ。と、是の時に諸の子、父背喪せりと聞きて、心大いに憂惱して是の念を作さく、若し父在しなば我等を慈愍して、能く救護せられまし、今我を捨てて遠く陀國に喪したまひぬ。自ら惟るに、孤露にして復恃怙なし、常に悲感を懷いて心遂に醒悟し、乃ち此の藥の色香味美きことを知つて、即ち取つて之を服するに、毒の病皆愈ゆ、其父子悉く已に差ゆることを得つと聞いて、尋で便ち、來り歸つて咸く之に見えしめんが如し。』

(日蓮宗釋典三四二頁)

- 六、藥發悶亂。宛轉于地。——一切衆生の苦慮の相。
- 七、是時其父。還來歸家。——釋尊の出世に遇ふ。
- 八、諸子飲毒。或失本心。或不失者。——衆生の迷の深淺のこと。
- 九、遙見其父。皆大歡喜。——釋尊の出世に遇ふて喜ぶ。
- 十、誤服毒藥。願見救療。——一切衆生が、菩提心を發して煩惱の消除を乞ふ。
- 十一、私は心中の苦悶を母に訴へた。
- 十二、依諸經方。求好藥草。色香美味。皆悉具足。——釋尊の長い間の修業の果徳。
- 十三、母の最後の大信仰心。
- 十四、此大良藥。色香美味。皆悉具足。——法華經の功德力

と。實にこの譬喩は、二千五百年の昔、釋尊が末法五濁の惡世に、主師親に反逆した、池ノ内三雄といふ一人の極重惡人の生れ出づるを豫知せられて、私を懲れんでこの有難い譬喩を説き殘されたのであるかの如く、寸分違はずまつたく私の身の上と符合してゐたのであつた。これこそ、實に私の轉向するに至つた最も大きな原因の一つであつた。それ故に、私はもつと詳しくこの理を語りつゞけたのである。それではこの譬喩と私とはどのやうな關係があるのであらうか、それは即ち次の通りである。

- 一、譬如良醫。——大聖釋尊のこと。
- 二、智慧聰達。——佛智、又は佛智見のこと。
- 三、善治衆病。——一切の煩惱を除くこと。
- 四、遠至餘國。——釋尊出世以前のことであつて、良醫の父と子が相離れてゐる意。
- 五、諸子於後。飲陀毒藥。——衆生が迷つてゐること、邪見に陥つてゐること。
- 六、不失心者。見此良藥。——迷ひ淺き者は法華經に近づくこと。
- 七、即便服之。病盡除愈。——法華經を信するものは即時に解脱すること。
- 八、餘失心者。乃至。——然與其藥。而不肯服。——迷ひ深き衆生のこと。
- 九、毒氣深入。失本心故。——大増長慢の人々のこと。
- 十、於此好色香藥。而謂不美。——法華經の大功德を知らぬ者。
- 十一、私は信仰なき失心者であつた。
- 十二、私は凡ての宗教を否定し、これを遠ざけた。
- 十三、私は共産主義を唯一の眞理と妄信してゐた。
- 十四、私は凡て宗教は亞片であると思つてゐた。
- 十五、父作是念。此子可愍。——釋尊の大慈悲心のこと。
- 十六、爲毒所中。心皆顛倒。——一切衆生の邪見のこと。
- 十七、共産主義等の邪見とその迷妄。

二十三、我今當設方便。——法華經以前の方便經、即ち權教のこと。

二十四、我今衰老。死時已至。——釋尊が入滅を豫告せられたこと。

二十五、是好良藥。今留在此。——信解の時機の到來を待つこと。

二十六、汝可取服。勿憂不差。——法華經の妙法力。

二十七、作是教已。復至陀國。——釋尊が假に涅槃を示して衆生を離れたこと。

二十八、遣使還告。汝父已死。——地涌菩薩の出現のこと。

二十九、聞父背妄。心大憂惱。——釋尊の滅後に於ける衆生の苦惱。

三十、私の爲めの心配から母の極度に老衰してゐるのを見て私はこのまゝ死に別れるのではないかと心配した。

三十一、常懷悲感。心遂醒悟。——一切衆生が發心すること。

三十二、毒病皆愈。——苦の一切衆生が、法華經によつて救済されること。

三十三、其父調子。悉已得差。尋便來歸。咸使見之。——本佛の常住不滅の理。

三十四、我が満期放免となりて母と子とが再會してお互に歡び會ふ時のことである。

三十五、私も遂に法華經の大良藥によつて共產主義の病が治り本佛の大慈悲によつて救済されたのである。

三十六、我が父調子。悉已得差。尋便來歸。咸使見之。——本佛の常住不滅の理。

三十七、我が満期放免となりて母と子とが再會してお互に歡び會ふ時のことである。

三十八、私も遂に法華經の大良藥によつて共產主義の病が治り本佛の大慈悲によつて救済されたのである。

三十九、我が父調子。悉已得差。尋便來歸。咸使見之。——本佛の常住不滅の理。

四十、我が満期放免となりて母と子とが再會してお互に歡び會ふ時のことである。

四十一、私も遂に法華經の大良藥によつて共產主義の病が治り本佛の大慈悲によつて救済されたのである。

四十二、我が父調子。悉已得差。尋便來歸。咸使見之。——本佛の常住不滅の理。

四十三、我が満期放免となりて母と子とが再會してお互に歡び會ふ時のことである。

四十四、私も遂に法華經の大良藥によつて共產主義の病が治り本佛の大慈悲によつて救済されたのである。

四十五、我が父調子。悉已得差。尋便來歸。咸使見之。——本佛の常住不滅の理。

かういふ喜びは私の過去半生にも否、凡ての人々も経験した人は少いであらう。實に不思議なほど私の身の上符合してゐたのであつた。

釋尊は、法華經壽量品に、この良醫治子の譬喩を説かれる前に、次のやうなことを説かれてゐるのである。

『我成佛してより已來、甚だ大いに久遠なり。壽命無量阿僧祇劫、常住にして滅せず。諸の善男子、我、本、菩薩の道を行じて成ぜし所の壽命今猶ほ未だ盡きず、復上の數に倍せり。然るに今實の滅度に非らざれども而も便ち唱へて當に滅度を取るべしといふ。如來は是の方便を以て衆生を教化す。』

と、即ち釋迦牟尼佛は成佛已來久遠甚大であつて、又未來に於ても常住不滅であるといふことを説かれてゐるのであつたとして、この良醫治子の譬喩を説き、重ねて、

『諸の善男子、意に於て云何、願、人の能く此の良醫の虚妄の罪を説く有らんや、否や。否なり世尊。佛の言はく、我も亦是の如し。成佛してより已來無量無邊百千萬億那由阿僧祇劫なり。衆生の爲めの故に方便力を以て、當に滅度すべしと云ふ。亦能く法の如く、我が虚妄の過を説くものあること無けん。』 (日蓮宗聖典三四四頁)

と、このやうに繰り返し、釋迦牟尼佛の常住不滅を説かれてゐるのであつた。私はこゝにはじめて、佛陀の常住の眞理



床次遞相を悼む

磯部滿事

一六

大臣級の人で宗教を政治に活用せんとした一人者として、床次さんは將來を囑目されて居た。アノ明治四十五年神、佛、耶の三教會同を催して、たごへそれが不調に終つたとはいへ、その後も毎年十二月の大晦日に十人ばかりの宗教家を招いて胸襟を開いた清集を續けられて居たらしい。本多上人御在世の時は必ずお出かけであつた。

本會館へも一昨年三月、日生上人の三周忌追悼會に出られて三教會同の真相をお話し下さつた、而してその時の講演を小冊子として多數知友へも頒布された様子であつた。やがて床次内閣ともなれば思想界に屹度記録すべき企ても出来たであらうと惟ふ時忽然として逝かれたことがいかにも法國の上から惜まれてならぬ。

いろ／＼歎徳すべき事柄もあらうが、爰に従二位勳一等の今日あらしめた裏面には全く涙ぐましい、又子女の教訓とすべき一挿話が傳へられてゐる。

いまだ生れざりし前の妻といふものが發見出来なかつた。かれは試験の難題に困つた學生みために、圖書館へ行つて、百科辭書をめくつて見たりした、床次氏らしい面目がうかがはれる。

かれがわざ／＼鎌倉まで栗の下駄を鳴らしに行つたのは『父母が生れて死ぬるまでの間に、なぜ、かうも莫大な借金を残してくれたか』をこそ聞かまほしかつたのである。さうして出来ることなら、親の借金などを屁とも思はないやうな大悟を得たく念願したのであつた。

ところが、その禪は、まことに要領を得ないことに了つた。

しかし、やはり禪の効きめは無いわけでもなかつた。

といふのは、爾來かれ自身が、まことにヌウボウとして不得要領居士に變生したからである『菘の借金に泣いた子が、浪花節の大シンパにまで』この間四十五年の時ッ風はすぎ去つたのであつた。

この薩摩殿は、するする出世の段階をはひ上

人生の模範生

四十五年も昔のことだが、帝大を出たての、若い官吏—大藏省試補—床次竹二郎が、或る日曜の朝木綿の羽織、袴に、栗の木の下駄といふ装立ちで、鎌倉の禪堂を訪れた。

眉の白い、赤ら顔の老禪師は、かれが座に就くか就かぬかに『父母未生前の汝は何ももんぢや』と大喝した。床次青年、一時間ばかり沈思黙考してゐる間に、すっかり顔色が蒼くなつて脂汗がタラ／＼と流れた。

『咄!この乾屎檝、今度の日曜までに考案して来いッ』老師は叱りつけて置いて奥の方へ消えてしまつた。

黙々として、栗の木の下駄を引きすりながら歸つて来た床次青年何日経つても、自分の父母

つてゐたが、その間に洋服は一著しきや拵へてゐない。

さうして何萬といふ親の借金をこくめいに月給袋で埋めて行つた、時効にかゝつてゐるものでもはちくり出して、向ふが忘れてゐたり、諦らめてゐたりするのまで、一々、五圓十圓と返して廻つた。著のみ著のまゝで、食ふや食はずの生活に、父の借金を征伏してゐたかれが一片の辭令で、松山から仙台へ—仙台から—岡山へと轉動して廻る都度、今まで自分の棲んでゐた借家を、きつと手入れして、疊換へをし、障子襖を張り換へ、壁を塗り直して置いて引越して去るのであつた。

それはしかし、かれよりもかれの前の夫人がよけいに、しからしめた傾向があつた。

先夫人—精様の妻清子さんは『あなたやつぱり疊換へをして出ませう。借金をしても、出世の首途ですもの……』

『あなた、もう一年この破けた冬服を着通してくださいね、私も夏冬通してこの單衣物一枚で

辛抱致しますから。さうして大臣になるまでは
 断じて桐の木の下駄を穿かないやうに、私も決
 して板裏草履以外は一生履きませんから……」
 とか、そんなことばかりいつてそれで「うん、
 よし〜」と模範生のやうな素直さで、破けた
 袴に栗の下駄を引ずつて出勤する夫を見送つて
 玄關の板へ熱い涙を落すのであつた。
 十八年前、原内閣のとき、この大願が叶つて
 床次内務大臣閣下が出来上つた。

その日の午後だつた。
 何を指しても、父祖の墓と、先輩各位へは報
 告とお禮に出かけなくてはならないといふので
 かれは著古るした例の木綿の袴と羽織を出して
 くれと女中に命じて置いて、机の前で紺足袋を
 穿かうとしてゐた。
 そこへ紋付の羽織を着て薄化粧をした夫人が
 兩手に新調の羽二重の羽織と、仙台平の袴と、
 博多の帯と、白足袋とを捧げて來た。
 「さ、けふはこれを着て行つてくださいまし、
 私はこれをお著せする日を待つてゐました。」

「う?」……
 玄關に出ると、夫人は敷石の上に、柱目の正し
 い桐の下駄を揃へて、デツと夫の顔を見上げた
 床次の大きな鼻の上を、つる〜と涙が走つ
 た、夫人も
 「わッ」とその脚もとへ泣き伏してしまつた。
 その夫人が死んだとき、床次氏は、めん〜
 として盡きせぬ情緒を、書き綴つて「たむけ草」
 と題して天下に配つた。

——今更に亡き妻戀しこの春は花も一しほ咲
 きそふものを——の歌に世人はいたく感動させ
 られたのであつた。
 毀譽褒貶は多くの人にあるでしょうが、私共敢て
 其の短を求むる要はない、その長を學び其の美を顯
 はして行きたい。右の記事を深く味ふ時に矢の走る
 は弓の力、男の仕業は女の力と 日蓮聖人の仰せが
 ヒシ〜胸をうつ。噫、この人、この夫人共に今は
 界を異にせられたけれ共、其人格の光は必ずや世を
 照らすであらう。謹みて各冥福を祈り奉る。
 南無妙法蓮華經

法華經講話

(第二十二講)

小林一郎

前講には、方便品の中で、十方世界の中には教が
 二種は無い、つまり佛の教といふものはたゞ一種し
 か無いといふところまでを讀んで居りました。それ
 はお釋迦様のお説きになりましたが、結局一つに
 歸するといふだけでなく、十方世界といふのですか
 ら、この世界ばかりでなく、この世界へ行つて見て
 も、佛の教といふものは結局一つしかないのだ、斯
 ういふことをハッキリと言はれたわけですから、どこ
 で、その教は一つであるのだけれども、その一つの
 教を本當に世の中に弘めようといふことになる、
 なか〜それは容易なことではない。何故かといへ
 ば、人の心の迷が深いのでありますから、その迷の

深い人間を相手にして教を説いて、結局みな同じ信
 仰に入るやうにしようといふことは普通の努力では
 出来ないことである、非常に骨が折れるといふこと
 をこれから以下に説かれるのであります。

舍利弗、諸佛は五濁の惡世に出たたまふ。所謂
 劫濁、煩惱濁、衆生濁、見濁、命濁なり。

(舍利弗 諸佛出於五濁惡世 所謂劫濁 煩惱濁 衆
 生濁 見濁 命濁)

佛が世の中に出て教を説くといふ時は、普通の時
 ではないのだ、世の中が非常に悪くなつて、モウ濁
 り果てた時代に佛が世の中に出て教をお説きになる
 のである。その濁りとか、世の中が悪くなるといふ

ことを大體分けて見ると五つの原因がある、これを五濁といひます。その五濁といふのは、劫濁、煩惱濁、衆生濁、見濁、命濁とあります。

「劫濁」といふのは、劫は非常に長い歲月といふ字で、物事は長い歲月経つと弊害が起る、これは佛教ばかりではなく、何事でもさうです。一事を永くやつて居るといふ弊害が起りますから、折々は改革をして新しい機運を造つて、その弊害を直さなければならぬといふことは、世の中の事でもみな同じであります。でありますから劫といつて非常に長い歲月経つて世が末になつて來ると、人間の生活の中にいろ／＼な間違が起つて、世間が複雑になりまから人の心が切迫して來る。世間が忙しくなる人間といふものは自分の事ばかり考へるやうになる大概の人は静かな時には人の事も考へてやるが、忙しくなると自分の事ばかり考へる。今日あたりそこら歩きても、そんなに人が混まないから、お老人

でも居れば傍へ寄つて「サアお通りなさい」といふ位のことと言ふが、縁日か何かで大變な人混みでもあつたら、道を譲りなどして居られないから、構はずに人を突きつけて行かうといふことになる。別に人間が變つて行きはしないけれども、忙しくなれば兎角に自己中心に物事を考へるといふことは、普通の人情として仕方の無いことです。マアそのために教が必要なのであります。若し教へられない人間であつたならば、忙しい時には必ず自己中心になる、ですから世が末になつてだん／＼複雑になつて來れば世の中にいろ／＼な悪い事柄が起つて來るのは、これは已むを得ない、それを劫濁と申します。

たところが、本當の自分の生命などを考へはしない小き自己の利害損得といふやうなことを中心にして物事を考へるところから、貪るごか、瞞るごか、嫉むごか、憎むごか、いろ／＼の迷が起つて來る。要するに小さな自己を中心として物事を判断し、解釋する。それからいろ／＼な間違つた行が出て參ります、これが煩惱濁であります。

それから「衆生濁」といふのは言換へると、人々の天性がそれ／＼違ふところからいろ／＼な間違が起るといふことです。すべての人の顔が違ふ通り心持が幾らか違ふ、氣分が幾らか違ふ、それだから「自分の心持をスツカリ知つて呉れる人が欲しい」……そんな事を言つたつてそれは贅澤の沙汰であります。顔が違ふ通りごか違ふ、丸で解らない人が多い世の中に、半分か、三分の一も自分の事を知つて呉れる人があれば、それは實に有難い事であつて、逆もスツカリ知るナンといふことの出來るものぢやない

その代りこちらに向ふの事は知らない、お互つてです。「こんなに骨折つて居るのに誰も認めて呉れない」と言つて愚痴を言ふ人がありますけれども、こちら人も人の努力を認めない場合が多い、それだからお互つてです。どうもこれは仕方がありません、人間が一緒に生きて居る以上は、心持が違ふ、身分が違ふ、境遇が違ふ、それ／＼違ふところがある。でありますからその違つた境遇、違つた身分、違つた心持を有つた人間が一緒に鼻を突合はして世の中に居るのですから、いろ／＼な面倒が起るといふことは、これは已むを得ない、それが衆生濁です。それですから何とかして一つの目標にみな向くやうに努めなければ、自然の儘に放つて置けばみな人間は背中合せになつてしまふ。さういふやうなわけで大勢の人間の間から、誰れも悪人が一人も居なくても、その氣分の違ひ、心持の違ひからさま／＼なる煩累が起つて來る。

それから「見濁」といふのは、物事の眼の着け所が違ふところから間違が起る。これはみな眼の着け所が違ふ筈です、社會が複雑になるとみなの仕事が違ひますから、違つた方面から物を観れば、右から観たのと、左から観たのでは違ふ、所謂人世觀、世界觀、自然觀といふやうなものもみな違つて来るこれは仕方がない。この頃はとも雨降らないから困る、あつちでも田圃に龜裂が入つたとか、こつちでも用水が乏しくなつて喧嘩が起つたとかいつて田舎の人は毎日空を見て降るやうにと祈つて居るらしい。けれどもこの間私の知つた人で氣象臺に勤めて居る友達が久振りに訪ねて来て、「どうも今年は洵に好い具合だ」と言ふ、「何故だ」と聴くと、「雨が降らないで夜よく星が見えて結構だ」と言つて居りました。私は「成程こんなものか」と思つた。星ばかり観ることを商賣にして居る人は、星が見えれば本當に嬉しい、「今日も星が見える、明日も星が

見えることばかり喜んで居る。百姓の方では「今日も星が見えて降りさうもない」星が見えることを恨んで居る。これは立場が違ふから仕方がない、眼の着け所が違ふ。斯ういふわけでありますから、社會が複雑になればなる程同じ物を観るのでも、右の方から観ると左の方から観るのでは、見所が違ひますから觀方が違つて来る。それを他の人の立場に身を置いて考へてやれば宜いけれども、世の中が忙しくなつて来るに、そんな餘裕がないから、そこで所謂「見濁」で、人々の見解、物の見方が違ふところから益々面倒になつて来る。面倒になれば益々心が躁つて来ますから、愈々以て人の境涯などには察しがつかない、それが見濁であります。

それから「命濁」といふのは、人間の命が短くなる。人間の命が短くなるといふことは、こゝに二つの困つた事が起る、一つは長い命でないのですから一生涯骨折つても十分の事が解らない間に死んでし

まふといふこと、これはモウ誰でも考へる事でありませうが、私共などもソロ／＼そんな事を考へて来た子供の時には、四十、五十ナントいふのはえらいもので、「五十位になつたら大概悟れるだらう」と思つて居つた、學校を卒業した頃は二十幾つでございしましたが、「マア六十歳まで位、生きたら大概はえらい事が出来るだらう」と思つた、サア四十になり五十になつて、モウ六十に達して手が届かうといふことになると、「逆もこれは六十では仕様がなない、せめて八十になるまで……」と、この頃思つて居る。どうも人間は相當の年配になつてみると、まだ何も出来て居ないナといふことに気が付く。多くの人はあれをやらうか、これをやらうかと思ふ中に豫定の半分も出来ないで恐らくは死ぬでせう。外部から見れば、あの人は立派な仕事をして居ると言ひますけれども、その人から見ればまだ／＼しなければならぬ事が多いでせう、これは已むを得ない事です。

ところが宗教の本當の意味から言へば、人間の身が死んだつて、心は死にはしないので、永久の命を有つて居るのでありますから、ナニモこの世の中に於て仕事を仕遂げないでも宜いわけですけれども、それは特別な教養を積み、特別な信仰を有つて居る人だけの話で、普通の人から言へば命が絶えてしまへば一生がお終ひですから、だん／＼先が短くなるほど心細いわけです。

それがマア一通りの命の短いために面倒の起る原因であります、モウ一つは短いと思ふのがいけなしいといふことです。短いと思ふからモウいゝ加減で廢してしまふ、これが一つはあるのです。「モウ自分も六十だ、今更やつても始まらない……」といふことになつて来る。本當はそんな筈はない。永久の命なんだから、死ぬ前の日からやり始めても宜いのだけれども、そこがツイ考がうまく行きませんで、モウ先が短いとと思ふと、「今頃からやるのは面倒臭

いから廢めてしまへ」といふことになつて來る、現に人にそんな事を言つて居る私がサウです。私は學生時分に毎年々々五月頃になると脚氣が起りますので、水に入ることが出来ません、到頭泳を知りませんでした。三十を過ぎた頃から脚氣がなくなつて、これから泳を始めれば宜いけれども、「今更どうも子供と一緒にやるのも……」といふことで到頭廢めてしまつた、この頃六十近くになつて泳も出来ませんから、それでお終ひです。どうもさういふ氣味がある、「何だか大人が子供と一緒にするのは馬鹿馬鹿しい、老人になつて若い者と一緒に今更やつてもつまらぬ」斯ういふやうなところから、ツイ〜必要は感じて居つても、修行を怠るといふこともありません。それで人間の命に限りがあるといふことのためにさまざま煩累が多い、斯ういふことが所謂命濁であります。

ところが煩惱が即ち菩提の本になる、煩惱即菩提

とは思はぬ、どんなに衰へて居つても、どんなに弱つて居つても、まさか明日とは思はない、何れその内に何とかやつてやれると思つて居る、けれどもその内が當になりはしない、その内に死んでしまふ。だからお互が本當にそこを考へたら宜いのです。お互が今晚死別れるかも知れない、老人ばかりぢやない、若い者でもさうです。人間の命は誰も請合ふ者はありませぬ。今晚死別れるかも知れない、例へば親子、兄弟、夫婦が今晚何か評ひをして氣持を悪くして、お互にブン〜して別れ〜になつて別の部屋で寝てしまつて、翌朝起きて見た時にその喧嘩した相手が死んで居たら、誰でも「この位なら昨日我慢をして喧嘩をするんぢやなかつた」と思ふに違ひない。その時に「いゝ鹽梅に死んでしまつた。昨夕喧嘩して勝つたから宜かつた」と思ふ者は、どんな人でもまさかありはしない。それが實は何時起きることか判りはしない。今晚お互が斯うやつて顔を

といふことを屢々佛が言つて居られるやうに、心の向け方が變つて來れば、命が短いといふことが却て吾々の心に善い心持を起させる本にもなる、つまり心の持ち方の問題です。「明日死ぬかも知れないから今日から始めてもつまらぬ」斯ういふやうな氣持で行けば、命の短いのが煩累の本になるけれども、併し「お互に明日死ぬかも知れない、せめて今日一日でも氣持よくやらうぢやないか」斯ういふやうに考へてみれば、命の短いといふことが、善い事の本にはなつても、悪い事の本にはならない。私共年取つた親を持つて居て、始終サウ思つて居つた、「大分親父は年を取つたナ、母親も大分年を取つたナ、先が短いナ」と思ひながら、まさか明日とは思はぬこれは人間の弱點です。「マア何れその内に……」といふ内に父も死んでしまひ、母も死んでしまつた今になつて見ると生きて居る間にモウチツと何とかがしてやれば宜かつたと思ふ。その時にはまさか明日

合せて居る中の誰かゞ、今晚死な〜いと誰も請合はしない。家の内でもさうでせう。ですからさういふやうに思ふならば、何時でも今日だけの命だと思つて、今日一日の事に全力を注いで今日一日堪へられるだけ自分が堪へて、人に不愉快の心持を起させないといふ心持があつて然るべきものである。さうなつて來れば、命の短い事を感ずることが却て人間に優しい心持を起させる本にもなる、これは心の持ち方でありませぬ。普通の心持で居りますと、命の短いといふことがいろ〜な悪い事の原因になるのであります。心の根本を立直せば、その悪い事の原因が却て善い事の原因にもなるのでありませう。

さういふやうなわけで、だん〜世が末になりますといろ〜面倒な事が起ります。さういふ時に佛が世の中に出て教を説かれるのだといふのでありませぬ。

次のお經文に、

是の如し、舍利弗、劫の濁亂の時、衆生垢重く、慳貪嫉妬にして、諸の不善根を成就するが故に、諸佛方便力を以て一佛乘に於て分別して三と説きたまふ。

(如し是 舍利弗 劫濁亂時 衆生垢重 慳貪嫉妬 成就諸不善根 故 諸佛以二方便力 於一佛乘 分別説三)

それでありますから、だん／＼世が末になつて来て、濁亂といつて、世の中が濁つて亂れて、混亂して參ると、衆生の「垢」といふのは迷の事、大勢の人間の迷が非常に重くて、さうして慳むとか、貪るとか、嫉妬するとかいふやうな心持ばかりが多くなつて来る。

貪るといふことは、すべての迷の本といつてあります。その貪るといふことは必ず慳むといふ心持と伴ふものでありまして、要するに慳貪です。欲しいといふ心持は必ず惜しいといふ心持がそれにくつ付いて来る。欲しい／＼と思つて物を取るのですから

『あいつは怪しからん奴だ、一人で持つて居やがる』
……といふやうな事になつて来る。

私は何時も山手線の電車に乗つて見ますと、實際慳貪嫉妬といふことを考へます。山手線の電車はグ／＼／＼東京を廻つて居りますから、電車の向ふ方向が始終變る、それで最初自分は日蔭の方に腰掛けて居つて、向側が日が當つて居ると何だか好い氣持です、『こつちは涼しいナ』……と思つて居る。ところが直ぐに方向が變つて来て、今度は自分の方が暑くなつて、向ふに日が當らなくなる、さうすると、『あいつ、うまい事をして居るナ』と思ふ。暫く経つて又こつちが日蔭になると、向側の人がこつちを睨んで居る。始終お互に睨めつこをして居る間に、何時の間にか東京驛に着いてしまふ、全く慳貪嫉妬です。お互に俺が／＼をやつて居て、人の事を見て根んだり、羨んだりして居る、人間の一生はあんなものぢやないかと時々思つて見るのであります。

骨折つて取つた物は人にやりたくない。恰度電車に乗つても、どうかして腰を掛けたいと思つてキョロ／＼周囲中見廻はして、人が立つた時に急いで腰を掛けた人は、今度はなかく／＼立ちあはしない、折角苦心して腰掛けたのだから、大概の人が来たつて立つてやりはしない。欲しいと思つて腰掛けた人は、今度は惜しいと思つて、どんな人が来ても譲りはしない。さういふ風に欲しいと惜しいは必ず伴ふ。それがお互が欲しがつて、お互が惜しがつて居るから、こちらの求める物は向ふが呉れない、向ふの欲しがる物はこつちがやらないのですから、結局だん／＼敵同士になることは、これはモウ仕方がない。それでお互に慳貪をやつて居りますと、自分の良い事は自分には氣が付かないで、人の良い事はばかり眼に着くから、嫉妬といふことになるのも、これも已むを得ない。自分の持つて居る物が良いといふことは知らない、人の持つて居る物の良いのだけが判るから

さういふ風なことが普通でありますから、それでいろ／＼な悪い習慣がその間に出来る、諸の不善根を成就する、世の中に對して悪い結果を與へるやうな、そんな行が澤山出来上つて行く。

それから「諸佛は方便力を以て、一佛乘に於て分別して三と説きたまふ」どうも人間は皆そんな眼の前の事に執はれて、卑しい心持を有つて居るのだから、初めから佛の道ナンといふことを説いても、なか／＼耳に入りさうもない。それで結局はみなを佛にしたいと思ふけれども、先づ相手に應じて三種に説いて、聲聞とか、緣覺とか、菩薩とか、それ／＼の道を分けて低い方から高い方にと、又極く低い方から深い方にとだん／＼と説いて行くのである、これは世の中の實際の状態に基いての説法で、已むを得ないことです。

舍利弗、若し我が弟子、自ら阿羅漢、辟支佛なりと謂はん者、諸佛如來の、但だ菩薩を教化し

たまふ事を聞かず知らずんば、此れ佛弟子に非らず、阿羅漢に非ず、辟支佛に非ず。

（舍利弗 若我弟子 自謂阿羅漢 辟支佛者不聞 不知諸佛如來 但教化菩薩事 此非佛弟子 非阿羅漢 非辟支佛）

それだから舍利弗よ、若し我が弟子が自分で自分は阿羅漢、辟支佛なりと謂ふて、佛といふものは但菩薩を教化するものだといふことを知らないで居るならば、それは情ない事である。「聲聞」とは度々申すやうに佛の教を聞いて世の中の無常を悟つた者「辟支佛」といふのは「緣覺」と譯するので、たゞ佛の教を聞いただけではなしに、自分の毎日出會ふところの見たり、聞いたりする事柄と思ひ合せて、世の中の無常を觀する者であります、世の中の無常を觀じて世の中に執はれない心持になつたからといつて自分で満足して、モウこれで佛の弟子になつた甲斐があるなどと思つたら、それは大間違である佛がさういふことを説いて、世の中に執はれない心

持を作らせようといふのは、それより更に進んで所謂菩薩の行を積む、己一身の努力を以て世の中も、人も救はうといふ尊い心持を起させるためだといふことに氣付かないで、たゞ世間に執はれないやうになつたら安心だと思ふ者があるならば、それは本當の佛の弟子とは言へない、斯う言はれるので、随分強い言葉であります。

一體私共の喜びとか、楽しみとかいふものは、どんなものが永久に續くだらうかといふことを考へて見ると、外部から與へられる樂といふものは永く續かないことは、誰でも氣が付く筈です。美味いものでも腹一パイ食べてしまへば美味くなくなる、綺麗なものでも始終見て居れば綺麗でなくなる、芝居なども偶に觀れば宜しいけれども、毎日々々三十日觀に來いと言はれたら随分苦しい事です。外部から與へられる樂は、暫く経てば嫌になる、これは當然の話です。ところが幾ら同じ事を繰返しても嫌にな

らない樂みが一つある筈です。それは何かといへば自分の心持と人の心持と一致した時の喜び、これだけは變らぬ、いろ／＼思ひ合せて見ますと、これだけらしいです。他の物は美味い物でも二度繰返せば不味くなる、三度目には尙更嫌になる。暑い時には涼しい所が宜いけれども、餘り涼しい所に居れば喉などをして風邪を引きさうになつて來る。同じ状態が續けば必ず嫌になるのでありますけれども、自分の思ふところ、人の思ふところが一致したといふことだけは、繰返せば繰返すほど餘計喜びを感ずるさういふ心持が自ら現はれて日々の談話になるのでありますから、今日あたりでも「お暑うございませう」と言つて見ると、案外氣持が好くなるといふことはやはりその心持の現はれでせう。解り切つた事です。みな自分の家で寒暖計を見て知つて居る、それをお互に「今日は暑うございませうね」「暑うございませうね」「九十度を越えましたね」「越えましたね」

「どうも雨が降りませんね」「降りませんね」……そんな事ばかり言つて居ても、チツとも新しい知識を與へるのではないけれども、それでもナンだか愉快です。今も二階で私は一つやつて來た、「随分暑いですね」「九十度を越えましたね」「今日は土用の入ですな」「土用の入ですな」兩方共同じ事を言つて居る、お互に新聞を見てそんな事は知つて居るさういふ日常の會話といふものが、何故に取交されるかといへば、自分が暑いと思ふ時に人が暑いと思ふと氣持が好い、自分がたまらないと思ふ時に人がたまらないと言つて呉れれば氣持が好い、この事だけは盡さない喜である。

そこで若し自分が向ふの人のために力を盡さうと思ひ、お互に自分を捨て、相手のためにと思つたその心持が相照し、相許した時に人世に於てこれほど大きい喜びは無い筈である。お互が自分を捨て、向ふのためにと思ふ、さういふ同士が顔を合はした時

にどんなに喜ばしいか、これより上の喜びはごうも無い、それが本當の菩薩行です。みながさういふ心持を以て小さい自己を捨て、外の人のためにも思つた、その同じ心持の人が一緒に住んで、一緒に話合つて居ることが出来たならば、本當の極樂がそこに實現されたのであつて、これ以上のものは恐らく無いでせう。

そこまで考へて見ると、世の中に執はれない心持を以て、自分だけ高みから世の中を見下して居るといふやうなことは、如何に心細い事か、解る。普通の人間は、吾々の生活もさうでありますが、皆煩惱がありますから兎角に世の中は面倒になつて行きますけれども、さればといつて吾々凡夫でも世の中を離れ切つた時には、随分淋しく感ぜられる。英吉利のジョンソンといふ十八世紀頃の小説家があります、非常に口の悪い人であつて「人世とはこんなものだ、一人で居れば淋しいが二人になれば面倒だ」

居ることが宜くなりますから、つまり己を捨てるといふ心持から今度は進んで人の爲に力を盡さうといふ気分にもなつて行くわけであります。それが解らなければ、たゞ捨てるといふだけで終つてはいけません。だから阿羅漢とか、辟支佛とかいふやうな、所謂世間の無常を觀じて涼しい氣持になつた者が、モウそれで澤山だと思つて「諸佛如來はたゞ菩薩を教化す」菩薩といふのは、自ら濟ふと共に人を濟はうといふ心持になつて居る者、さういふ人間を尙ほそれ以上によく教へて、結局佛の境界にまで到達させやうとして教を説いて居られるのだといふことに氣が付かない、そんな事を聴きもしない、又氣も付かないで終るならば、さういふ人間は本當の佛弟子ではない、佛の弟子とは言へない。又「阿羅漢に非ず辟支佛に非らず」と言つて居るのが面白い、「阿羅漢」といふのは迷を離れた者が阿羅漢ですが、世の中のため、人のために力を盡すことをしなければ、折角

と言つて居ります。洵にその通りです。一人で居れば淋しい、二人になれば面倒だ、だから元の一人になつて見れば又淋しい、やはり二人になりたい、そんな事をやつて居る間に一生経つてしまふ。一體淋しいのが良いのか、面倒なのが良いのか、わけが解らない、その内に五十になり、六十になり、今更どうにもならぬと思つて諦めてしまふといふのが普通でせう、けれどもそれはつまらない話です。淋しいのもつまらないが、面倒なものもつまらない、そこにお互が自分を捨て、見れば、互に知り、互に己を捨て合ふ心持の中にお互の満足といふものが見出される筈である。それが大乘の教、それが菩薩行といふもの、中心の精神になるのであります。

だからそこまで行かなければいかぬ。併ながら初めからさういふわけに行きませんから、先以て自分を捨てろといふところから教へる。自分を捨て、見ると捨てることは出来ない、外の人と一緒に居ると捨つて居ります。洵にその通りです。一人で居れば淋しい、二人になれば面倒だ、だから元の一人になつて見れば又淋しい、やはり二人になりたい、そんな事をやつて居る間に一生経つてしまふ。一體淋しいのが良いのか、面倒なのが良いのか、わけが解らない、その内に五十になり、六十になり、今更どうにもならぬと思つて諦めてしまふといふのが普通でせう、けれどもそれはつまらない話です。淋しいのもつまらないが、面倒なものもつまらない、そこにお互が自分を捨て、見れば、互に知り、互に己を捨て合ふ心持の中にお互の満足といふものが見出される筈である。それが大乘の教、それが菩薩行といふもの、中心の精神になるのであります。

だからさういふわけに行きませんから、先以て自分を捨てろといふところから教へる。自分を捨て、見ると捨てることは出来ない、外の人と一緒に居ると捨つて居ります。洵にその通りです。一人で居れば淋しい、二人になれば面倒だ、だから元の一人になつて見れば又淋しい、やはり二人になりたい、そんな事をやつて居る間に一生経つてしまふ。一體淋しいのが良いのか、面倒なのが良いのか、わけが解らない、その内に五十になり、六十になり、今更どうにもならぬと思つて諦めてしまふといふのが普通でせう、けれどもそれはつまらない話です。淋しいのもつまらないが、面倒なものもつまらない、そこにお互が自分を捨て、見れば、互に知り、互に己を捨て合ふ心持の中にお互の満足といふものが見出される筈である。それが大乘の教、それが菩薩行といふもの、中心の精神になるのであります。

又舍利弗、是の諸の比丘、比丘尼、自ら已に阿羅漢を得たり、是れ最後身なり、究竟の涅槃なりと謂ひて、便ち復た阿耨多羅三藐三菩提を志求せざらん。當に知るべし、此の輩は、皆是れ増上慢の人なり。所以は何ん、若し比丘の實に阿羅漢を得たる有つて、若し此の法を信せずといはん。是の處有ること無けん。

(又舍利弗 是諸比丘 比丘尼 自謂已得阿耨多羅

三藐三菩提 當知此輩皆是増上慢人 所以者何 若

有比丘實得阿羅漢 若不自信此法 無有是處) 諸の比丘、比丘尼が已に阿羅漢といふやうな迷を

除いた境界になつたとか、その迷を除いてしまつたら、これは最後身といつて、モウ佛弟子の修行の一番絶頂で、これ以上何も無いと思つたり、或は究竟の涅槃といつて、覺りの行きどまりだといふやうに考へて、阿耨多羅三藐三菩提といふ即ち佛の智慧を自分が具へるやうにといふ心持を發さないで居るといふならば、この輩はみな是れ増上慢の人である。増上慢といふのは未だ得ざるを得たと思ふこと、自分は解らないくせに解つたつもりになつて居る人間であつて、これはどうも仕方のない者である。

何故かといへば、若し比丘あつて實に阿羅漢を得て本當に煩惱を取除いて、世間の名前にも、名譽にも、地位にも、位にも全く執はれないやうな心持になりながら、それでも『此の法』——大乘の教へ世を濟ひ、人を濟はうといふこの道のあることを信じないといふ者があるといつても、『是の處有ること無し』そんな筈は無い、人間は何もしないで居られ

紙屑籠みたいなになつて居る、その紙屑を放り出さないと大事な事は入らないだらう」とよく言ふのであります。要するに身の力、心の力には限りがありますから、要らないところに力を使つて居れば、大事な事に使へないわけです。要らない事に心を使はないやうになれば、ジツトしては居られないのでありますから、何かやはり意味のある方に使ふに相違ない、決して人間は怠け者ではない。

さうでありますから、本當に世の中の名譽とか、地位とかいふものを少しも求めない心持になつて居ながら、世のため、人のために盡さうといふ氣分が起さないといふ、そんな筈は無いといふのです。若しそんな人間があるとすれば、その人間はまだ名利に執はれて居るからである、本當に名利の念がなくなつて、自分一人ですましてなど居られるものではない、斯ういふことを言つてあるのであります、これは確かにさうであります。だから迷がなくなつ

ない筈である。怠け者といふのは、要するに要らないところに頭を使つて居る者が怠け者である、實際人間は怠けては居られない者である、ナニも言はないでジツト一週間も居つて見ろと言はれたら出来はしません。吾々のやうに必ず何時から學校へ行つて喋べらなければならぬといふことになる、偶には休んで見たいといふ氣分も起りますけれども、誰も何とも言つて来ないとなると、どこかへ行つて何か喋べつて見たくなる、『江戸川の橋で往來の人に向つて嗚鳴つて見たい』……クライの氣焔は揚げるかも知れない。人間は決してジツトして居られる者ではない、しかし多くの人は怠け者である、何故怠け者かといへば要らない事に心が向いて居るから、大事などころに心が向かないのです。私共よく學生にいふ『どうも君達の頭の中に紙屑が一ぱい入つて居つて仕様がな、新聞を讀んだり、雜誌を讀んだり要らないところを讀んでつまらぬことを覺えて頭が

て行くに隨つて、更に進んで世の中のためにも、人のためにも力を盡さうといふ氣分が起つて来る。

さういふ世に執はれない心持がありさへすれば、何か求める心持が起る、その求める時に、佛の教といふものが何かの形に於て世の中にあるのだから、きつとその教へと自分の心が近づいて行くわけである。教の全然なくなる時といふものは無い、何かの形で遣つて行く、人間の言葉になつて遣つて行くか書いた物になつて遣つて行くか、繪になつて遣つて行くか、風俗習慣の中に織込まれて遣つて行くか、教といふものがなくなる時といふものは無い。だから求めたいといふ心持があれば、どこかで探し出して、どこからかその教に入つて行けるわけです。要するに教へる人が無いなどといふのは、それは責任を遁れて居るだけの話であります。私共の友達にそんな者がありまして『君は道だの、教だのといふけれども、一體今の世の中に於て吾々のやうな教育を

受けた者を満足させるやうな教を説く者がどこに居るのだ」と言ふ。それだから私は「そんな馬鹿な事を言ふのは、お前が頭が悪いのだ、本當に求める心持があつたならば、この天地の間のどこにも教の種のなくなる時といふものはありはしない、どこにだつて何等かの形になつて居る、一生懸命に求めて居ればどこかに見つかるに相違ない、どこにも無いといふのは自分の熱心が足りないからである」と申すのであります。此處もその事をいつて居るのであります。迷がなくなつて見れば、必ず教を求め、必ず道を求めて行かうといふ氣分が起る筈である。

佛滅度の後、現前に佛無からんをば除く。

(除佛滅度後 現前無佛)

尤も佛の滅くなつた後に、現前に佛の無いといふ時代があつたならば格別だが、「除く」といふのは、さういふ時になれば例外だが、そんな筈はないといふ意味です。佛が滅くなつた後でも佛の教といふも

のは何かになつて遺つて居る。現に今日でも經典も遺つて居ればいろ／＼な風俗習慣の中にも編み込まれて遺つて居るのでありますから、佛様にまのあたりお眼にかゝることは出来ませんが、何かの教はある、書物とか、或は書とか、いろ／＼な物を通じて佛として佛と俱に居るやうな氣分にもなつて行くといふことはきつと出来る筈です。若し佛の教のない時があつたならば、それは例外だけれども、そんな筈はないのだから、必ず佛が滅くなつても佛の教はどこかに遺つて居る、だから世に執はれない心持があれば、きつとその方に心が向いて行く筈である。

所以は何ん、佛滅度の後に、是の如き等の經を受持し、讀誦し、其の義を解せん者、是の人得難ければなり。若し餘佛に遇はざらば、此の法の中に於て便ち決了することを得ん。

(所以者何 佛滅度後如是等經 受持讀誦 解其義)

者 是人難得 若遇餘佛 於此法中 便得決了

何故ならば佛の滅度の後に於ても、是の如き經といふのは、ナニモ文字で書いたお経ばかりがお経ではありません、經典の内容を成して居る佛の教が經であるから、その經を受持、讀誦してさうしてその義を解する者があるならば洵に結構だが、その人はなか／＼容易に得難い。得難いといふことは無いといふことではない、さういふ人はなか／＼得られない、だからどうかすると、佛の教が遺つて居りながら、遺つて居ると氣が付かないで修行しない人があるかも知れない。それはなか／＼難かしい事ではあるが、教だけは遺つて居るのである、それであるから自ら熱心に求めて行つて、又解つたらそれを世に弘めようといふ心持さへあれば、即ち求めようといふ心持、弘めようといふ心持があれば、その人々の努力に依つていつの場合でも、世の中がどんなに險

惡になつても、必ず教といふものは活き復つて来る筈です。

「若し餘佛に遇はば」お釋迦様ばかりでない、他の佛に出會つたところが、佛の教といふものは二種は無いのだから、他の佛が教をお説きになつても、その説いた教は今、釋迦牟尼佛が説いた教と精神は同じ事であつて、その同じ教の中に於て本當の覺りを開くことが出来るであらう。

舍利弗、汝等當に一心に信解して、佛語を受持すべし。諸佛如來は言虛妄無し。餘乘有ること無く、唯だ一佛乘のみなりと。

(舍利弗 汝等當に一心信解受持佛語 諸佛如來言無虛妄 無有餘乘 唯一佛乘)

だから舍利弗よ、お前達は一心に信解して——「一心信解」といふことは短い言葉であります、洵に良い言葉で本當に心を一にして、心をつまらない事に向けないで、慕地に佛の教を學んで、而してそれを

信じ、又その意味の在るところをよく理解して、さうして受持して、心にこれを信じ、心にこれを持つといふ風にやつて行くが宜しい。「一心に信解し、受持す」これだけで大體信仰生活の要領は盡きて居るやうであります。一心にといふことは言換へれば、外の方法手段としてはいけないといふ意味がこの中に籠つて居る、一心に佛の教を信する、佛の教を學ぶことばかりを考へる、それが一心にといふことである。ところが世間の信仰といふ中にはさうでないのがある。一心でないのがある、信心したら儲かるだらうとか、信心したら地位が高くなるだらうとか或は信心して居るといふことを看板にして世間の信用を得たいとか、種々ある、一心でありはしない、心が方々に向いて居る、方々に向いて居つて佛の教を信しても、それは信じられるものではない、だから一心にといふ。自分は迷つて居る凡夫である、その迷つた境界を離れて佛の境界に近づきたいといふ

その事ばかりを考へて一本調子になつて佛の教を學んで行つて、さうしてそれを信じ、それを解し、解つたならばそれを自分の物として實行する、斯ういふやうにやつて行けばそれで宜い。
 「諸佛如來は言虛妄無し」佛はみな心の証かすやうなことを仰しやるわけは無い。又「餘乗有ること無く、唯だ一佛乘のみなり」高い教、低い教、いろ／＼あるけれども結局は一佛乘、みな佛と同じ境界にしてやりたい、すべての人間を教へて佛御自身と少しも變らないものにしてやりたいといふ、この目的で教を説かれる、これ以外に何も無い。この所をしつかり掴まへて信仰を賜んで行くやうにといふことを一通り述べられました。
 爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して偈を説きて言はく。
 (爾時世尊欲重宣此義、而説偈言)

ふものは場合に依ると、今まであつた事の繰返しになつて居る場合もありますけれども、この偈は唯の繰返しでなくして、前の所にまだ言はれなかつたところまでも説かれてありますので、大分重要なものと古來考へられて居ります。

比丘比丘尼の

優婆塞の我慢なる

増上慢を懐くこと有る

(比丘比丘尼

有懷増上慢、優婆塞我慢、優婆夷不信)

これは釋尊が更めて教を説き始められる時に、そこに幾人かの人間が自分達はモウ聞いてもいけないと思つて逃げ出してしまつたといふ話がありましたその事から偈が始まります。比丘、比丘尼の増上慢を懐いた者、それから優婆塞の我慢なる者、優婆夷の不信なる者、これは文章が五字づゝの句になつて居りますから斯う書いてありますが、こんなに別々にしないでも宜しいので、比丘、比丘尼、優婆塞、

優婆夷の増上慢を懐ける者、我慢なる者、不信なる者といふ意味です。増上慢は解らないに解つたやうな氣になつて居る者や、我慢といふのは自分の都合ばかり考へて、俺が／＼と考へて居る者や、又不信なる者、この「不信」といふことに就て一寸この際申して置きたいのであります。不信といふことは自分を中心にするから不信になる、「そんな筈が無い」と思ふ、それが不信の本です。自分は多寡の知れた者で、自分に解らぬ事を知つて居る人が多いのは當然の話である。ところが人間の情として、自分が考へて出来さうもない事は人も出来さうもないと思ふ、それだから信じない。「そんな事を言つたつて當にないだらう」と思ふ、それは普通の凡夫でありますれば、仕方が無いでせう。ところが佛の教を學んだ以上は、さういふ心持が起きて居る筈は無いのだけれども、考が足りせんとさういふ風になるのであります。餘り佛の教が廣大無邊なもので

あると、「どうも教としてはそれは結構ですが、とても實行は出来やしない」……斯ういふことになり、よく世間でもさういふことを聞くのであります。何か新しい議論が出来ると、「理論としては結構だが、逆も實行が出来まい」と言ふ人が多い。初めから出来まいと思つては出来ないのが當然である、やつて見なければ判らない、ところが大概の人はさうです。チョット自分出来さうもない事を聞くと「理論としては結構だが、逆も實行出来さうもない」……さういふことを言つて居た日には人生の進歩といふものはありはしない、理論として結構だつたら、兎に角實行するやうに努力しなければならぬ。初めから出来ないだらうナンと言つてしまつては出来るわけが無い。だから不信といふことは非常に大きな罪悪です。自分が信じないといふことだけで黙つて居れば宜いけれども「出来さうもない」と言ふものだから、出来さうなものだと思ふ人が「あ

て居る。勝れた者を怖がつて劣れる者に順ふ。私共は學問をする時にこの癖がある、勝れた者を怖れる非常に善い事を聞いても「それは逆も自分の力では出来さうもない」といつて怖れる、それよりつまらないものを「マアこの邊で宜からう」といつて善い者を怖がつて、悪い者に順ふ。これが宜しくないといふことを、梵網經といふお經の中では非常に厳しく言つてあります。努力を惜むからいけない、どんなに骨が折れたつて一番善い物を求めなければいかぬぢやないか、それを自分の力ではそこまで行けさうもないと思つてその勝れた教を聞いても怖がつて寄付かない、而してそれより劣つた者に順ふ、それで澤山だと思つて居る。だから人間の辛棒が足りなから、さうして又さういふ心持の者が他の者を誘ふて困るといふことを仰しやつて居る。自分が出来ないと思ふと「お前も出来ないから俺の仲間になれ」といふやうになる。汽車に乗り遅れた時には乗り遅れ

あさうかな」とその仲間になつてしまふ。人間といふものは普通の凡夫であると骨折るのは嫌ですから骨折つて見ようといふ時に「骨折つてもつまらない」と言はれれば、それをよい事にして骨を折らなくなつてしまふ、ですから不信といふものは非常に大きい罪を作るわけです。

是の如き四衆等

自ら其の過を見ず

其の瑕疵を護り惜む

(如是四衆等 其數有五千 不自見其過 於戒有缺漏 護惜其瑕疵)

さういふやうな比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の四衆はその數五千人あるが、自ら其の過を見ず、自分で自分の間違を気が付かない、気が付かないのだから、戒に於て缺漏有り。これはお釋迦様がお弟子を教へられる時にいろ／＼な戒を與へられて居りますが、その中に「怖勝順劣」といふことを戒められ

た仲間のあるのが氣が強い、自分一人乗り遅れたと思ふとガツカリするが、外にも乗り遅れた者があると思ふと、「俺一人ではなかつた」と思つてチョット氣樂になる。それと同じで自分一人遅れて居つてはつまらないから、自分が遅れて居ると他の人を引張つて、成るべく遅れた仲間を拵へやうとする、卑しい事ですけども人情です。ですから勝れた者を怖れて、劣つた者に順ふといふ心持があるとその人一生がつまらないのみならず、大勢の人間を誘惑してその進歩を妨げることになつていけないといふことを戒められて居る。

さういふことを戒に於て缺くるところが有るといふ佛の戒は一通りは守る、「嘘をつくな」「盗をするな」「人殺しをするな」位の戒は守るけれども、進んで佛になるといふ妨げをするといふことは非常な罪である。その戒を守るといふことをしない、だからどうもこの連中は困る。

さうして「其の瑕疵を護り惜む」これは良い言葉です。自分の瑕疵を大事にして居るといふ、兎角人間はさういふ氣味があります。チョット指先に傷が付いた、その傷を出来るだけ早く癒してしまへば宜い。例へばチョットそこらで轉んで取敢へず絆創膏位を貼つて置きます、しかし絆創膏を貼つて居つては實は危い、轉んだ拍子にどんな微菌が入つて居るかも知れないから、家へ歸つたら絆創膏を引剥いでしまつて、お醫者を頼んで薬で洗つて十分癒せば宜いけれども、一旦絆創膏を貼つて少し痛みが軽くなつて居ると、又これを剥がすのは痛いから大事にしてツツとして置く、そのために取返しつかないやうなことになる例は随分ある。それと同じことで人間は自分の悪い所を知るといふことは自分で苦しいだから悪い所を知りたくない「マアこの邊で善いにして置かう」といふやうな氣分になる、それを自分の瑕疵を護り惜むといふ。瑕疵を大事にして人に見

の米の中の糠糠見たいなものであつて、どうもつまらぬ者であるが、それは佛の威徳の故に去りぬ、佛様の徳が非常に勝れて居つて、その佛様の良き教を聽くに堪へられなくなつて彼等は出て行つた。これらの人々は福徳尠くしてまだ修行が足りないでその人間も徳も十分に出来て居ないものですから、是の法を受くるに堪へず、「是の法」といふのは、これから本當の菩薩の道を説いて聽かさうと思つて居るのだが、その菩薩の教を聽いてそれを實行しやうといふだけの力が無いのである。だからモウ仕方が無い、出て行つてしまつたら暫く彼等に委せて——これは前にも申したやうに決してこれを捨てるのぢやない、又世の中に出て苦んで、惱んで、逆もいけないといふことに考が付けば再び戻つて来るから、その時まで暫く突放して置いて、自分で苦まして自分で反省する時機を待つより仕方が無い。

此の家は枝葉無し 唯だ諸の眞實のみ有り

せない、その瑕疵を癒す方法をしない、だからいつまでも瑕疵が癒らない、よくさういふことがある。暗闇が好きだといふのはそれナンです、明るい所へ出ると自分の缺點が見えるから、成るべく暗闇が好きだといふ、大概の人は暗闇を好くやうな一種の氣分を有つて居る、暗闇に居つて自分で自分を満足して足れりとして居るやうな氣分がある、それは實にあさましい事でありませんが、ウツカリするとさういふ氣分がある、自分の傷を痛いのを我慢して洗つて癒せば宜いけれども、それだけの勇氣が無い。

是の小智は已に出でぬ 家中の糟糠なり
佛の威徳の故に去りぬ 斯の人は福徳尠くして
是の法を受くるに堪へず

(是小智已出 家中之糟糠 佛威徳故去 斯人尠福徳 不堪受是法)

斯ういふ小智の者、智慧の足りない極く低い考の者は今出て行つてしまつた、これは大勢の人間の中

(此家無枝葉 唯有三諸眞實)
あとに残つたお前達はモウ枝葉のやうな小さい方に心を向ける者は無くて、本當に眞面目な、眞實な心持を有つて居る者ばかりである。だから今度は一つこの人々のために自分が世の中に出て教を説いたその本當の心持を打明けて話さう。

舍利弗善く聽け 諸佛の所得の法は
無量の方便力をもて 衆生の爲に説きたまふ

(舍利弗善聽 諸佛所得法 無量方便力 而爲衆生説)

舍利弗よ善く聽け、佛は自分で修行して自分が覺つた、その覺つたところを方便力を以て衆生のために説くのである。こゝに何故「方便力をもて」といつて居るかといふことを注意しなければならぬ。佛が自分で舍利弗よ、シツカリ聽け、自分の本心を打明けるぞと言つて置いて、何といふかといふと、佛は自分で覺つたところを方便の力でみなのために説

いてやるのだといふのですから、少しこれは變です
何かモウ少し言ひ方がありさうなものです。舍利
佛よ、シツカリ聴け、佛が自分の覺つたところを有
體に説いてやるぞと言つて呉れさうなものではない
か。他のつまらない奴はみな出て行つた、お前達だ
けは本當に頼もしい者だといふ、その頼もしい者の
ために本當に自分が説いてやるからシツカリ聴けと
いふのだから、前後の釣合からいへば、お前達に言
ふ事は自分の覺つたところで少しも間違ひないぞと
いひさうなものである。それをシツカリ聴けと言つ
て置いて、佛の教へた事は方便力を以て説くのだと
いふのでは、何だか話が後戻りしてしまつたやうで
文章が變です。それはやはり讀む時に氣を付けて讀
まぬと、いゝ加減に讀んでしまへばそれまでとあり
ますけれども、何故そんなに方便力と言つて、眞實
に説くといはなかつたか不思議な譯であります。
それは斯ういふことです。眞實の事を説くといふ

ことは、本當にいへば眞實の事は説けないのであり
ます。前にその事は繰返してある、佛と佛ばかり解
るのだと斷つてある、諸法の眞實の相を知ることは
並の人間では出来ない、佛と佛とのみが眞實の事が
解るのであつて、佛でない者には解らないと前に言
つてある。それだからいくら言へといつても言へる
ものぢやない、人間の使ふ言葉や、人間の使ふ文字
で佛の覺つたその内容が言へるものぢやない、言葉
といふものは限りがある、文字にも限りがある。だ
から佛の教の中に方便と眞實と假に別けて見るけれ
ども、眞實の教といはれるものでも、言葉に現はし
て居るところはまだく方便です。言葉では言へな
いだからその言葉で言はれたところを頼りにして、
あとは自分の心で自分で捉へるより外にない、言葉
だけ解つても解つたといふものぢやない。要するに
教といふものはみな方便になつてしまふ、口で言つ
て教へるといへばそれは方便になつてしまふ、文字

で書いて教へるといへばそれは方便になつてしまふ
その言葉で言へない事がある、これは教を學んだ者
が眞心を以てこれを自ら體得するより外に途は無い
それが又一人で坐つて考へて居つても仕様の無い事
であつて、これは實際に行つて自分がやつて見て、
さうして「成程こゝだナ」といふところを捉まへる
より外に途はありはしない、その事は餘程シツカリ
考へなければいけない。私共などは力の無い者であ
りますから此處でお話したところが、確な事はいへ
ませんけれど、假に私が十分説明し得たとしても、
私の説明などは何でもないものであります。又あな
た方が私の話した事はシツカリ解つた事は何でも
ない、それは、モウ千萬分の一に過ぎない、あとは
自分で考へて自分で實行して見て、行の上にて成
程こゝだナと捉まへる、自分で捉まへない人はいつ
まで經つても捉へられないのです。
日蓮聖人が鎌倉に於て十九年の間教を弘めて、而

して有ゆる艱難を冒して佐波に島流しにされて、佐
波に落着かれて初めて言つた言葉は「日蓮 法華經
一部讀みて候」法華經が漸く解つたといはれた。そ
れはさうです、理窟を言つたのでは解らない、實行
して見て有ゆる艱難の中を通つて、有ゆる困苦の中
を通つてそれでも自分の信念が動かないで命を全う
して、自分の教が誰のためにも曲らなかつた、どん
な脅迫、どんな誘惑を受けても曲らなかつたといふ
ことを實行し得て、初めて「法華經が讀めたナ」斯
ういふ自覺が出来上つたわけであります。だから經
典を讀み、その意味を講釋することなどは頼りない
ので、言葉で説明するのは頼りない、といつてやら
ないよりはましだからやつて居りますけれどもこれ
は頼りにならぬ、要するに自分の努力に外ならぬ。
ですからシツカリ聴けといつて置いて、その時に
佛の教といふものは方便だ、口に依つて説くのだ、
だから説いたところがだんく深入して來ると佛で

なければ解らぬことになりすから、それは銘々がよく實行して、よく考へて銘々で覺るより外に途は無いぢやないか、斯う説かれるのであります。ですからこの經典の文字をよく穿鑿して見ると成程と感ぜられる、お釋迦様はやはりさういふやうな心持で吾々に教をお弘めになつたのだらうと思ふ。

衆生の心の所念 種種の所行の道
若干の諸の欲性 先世の善惡の業
佛悉く是を知しめし已りて 諸の緣譬論
言辭方便力を以て 一切をして歡喜せしめたま

(衆生心所念 種種所行道 若干諸欲性 先世善惡業 佛悉知是已 以諸緣譬論 言辭方便力 令一切歡喜)

しかしながら教といふものいろいろあつて、衆生の心の所念、みなの中で考へて居る事、或は種種の所行の道、みな實際行つて居る毎日の行、又若干の諸の欲性、人間がどういふことを欲望として居

三、伽陀——孤起頌 四、尼陀那——因緣
五、伊帝目多——本事 六、闍多伽——本生
七、阿浮達磨——未曾有 八、阿波陀那——譬論 九、優婆提舍——論義

これが十二部經の中の九つです。これは大乘とか小乗とか、有ゆる經典に通じてどの經典にもこの九つの事柄が含まれて居るといはれて居る。一番初めに「修多羅」譯して「契經」といふのは、普通の文章で教を一通り説いてあるところでありす、これは今の言葉では「長行」といつてあります。偈でなく今まで讀んで來たやうな普通の文章であつて、佛の教を縱横に説き述べてありますところを謂ひます。

それから「祇夜」といふのは「偈」です。三字とか、四字とか句を疊んで詩のやうな形になつて居るもの、重頌といふのは印度の語では偈といふ。偈は普通四句以上で、二句や三句のは無い、今まであつたのも大概四句以上でありました、中には四句を幾

るか。例へば人間の性質はどういふ性質であるか、又この世ばかりの命でありませぬから、前の世からの永い間の一切の善惡の業、斯ういふことを佛が悉く知しめし已つて、而して諸の因緣、譬論、言辭、方便力を以て一切の者をして喜ばせるのであると言はれる。

この所に九つの事が擧げてあります。大體佛のお説きになりました中の事を細かに分けて、十二部經といふことが言はれて居るのであります。十二部經の中の九つがこれから以下の三、四行の間に擧げてあります。十二部經といふのはお經に十二種あるといふのではありません、お經の中に説かれてある事柄が十二通りの事柄を含んで居るといふ意味であります。これは法華經を讀むばかりでなく、他の本をお讀みになる場合にも始終出て來ますから申して置きます。

一、修多羅——契經 二、祇夜——重頌

つも重ねて八十にも、九十六にも、百にもなつたのがあります。それを重頌といふのは、前の長行で言つてある事をその儘繰返して言つた場合です。

それから「伽陀」といふのは「孤起頌」と譯す、前の長行の方で言つて居ない事を別に言ふ場合、偈に二種ある、繰返す方の偈と、繰返さないで前にない事を更めて言ふ場合がある。

それから「尼陀那」「因緣」といふのは、事實を話すことです。理窟ばかり言つて居つては解りませぬから、むかし斯ういふことがあつた、斯ういふ人がこんな行をしたといふ、過去にあつた事實を擧げてその教を領解させるやうにすること。

それから「伊帝目多」「本事」といふのは、佛のお弟子や何かの教を聽く方が、お前は今さういふやうな生活をして居るが、以前の世に於ては斯ういふことをしたといつて、教を聽く人の前世の事を説かれる。

それから「閑多伽」「本生」といふのは、佛様御自身が今は今急に佛になつたのぢやない、前の世からこれ／＼の善根を積んで佛になつたのだといふ風に佛の前の世の事を説かれる。

それから「阿浮達磨」「未曾有」といふのは、不思議な事が現はれる、例へば眉間の白毫の光が東方を照したといふやうに、大勢の人間の注意を惹き心を改めしめるやうな出来事がそこに起つて参ります。

それから「阿婆陀那」「譬論」これは別に説明を要しない、譬のことでありませう。

それから「優婆提舍」「論義」といふのは説明です。一通りいつたのでは解りませんから、その意味を更に詳しく説明をする。

大體この九種のもものが、法華經ばかりでなく、どんなお經でも含まれて居ります。その事をこゝに申してあります。お釋迦様が今まで始終教を説きに

極くつまらない眼の前の自分の一身の苦みとか、極みとかいふものを除きさへすれば宜いと考へて、そんなに先の事までも考へない人間が多い。さういふ人間は「生死に貪著」するといつて、人世のいろいろな變化に心を留めて、佛様の教を聞いても、その教の中の極く奥深い方の道を實行しないで、自分がいろ／＼な苦みに悩まれて毎日々々無理な生活をして居る者がある。さういふ者のためには「涅槃を説く」といつて、苦みや悩を除くがための假のさとりに普通の苦を除く極く低い方の教を説いてやつたといふのであります。これは此の九種の教が普通の經典にもありますから、それ等の事を一通り述べられたのであります。

しかしながらこれだけでは十分ではない。これだけで済めばマア一通り覺りは開けるけれども、これだけでは十分でないので、この以外にまだモウ少し別のものがある。

なりました場合に、この九つの方法で説かれた「諸の縁といふのは因縁、「譬論」は譬へ、それから「言辭」は言葉、「方便の力」といふのはやはり説明の方法でありませうが、いろ／＼の説明の方法を用ひて一切の人間をして喜んで聽かした。

佛陀及び本事

或は備多羅

亦因縁

本生、未曾有を説き

優婆提舍經を説きたまふ

譬論並に祇夜

(或説備多羅 佛陀及本事 本生未曾有 亦説於因縁 譬論並祇夜 優婆提舍經)

斯ういふやうないろ／＼な方法を以て教を説いた

鈍根にして小法を樂ひ

生死に貪著し

諸の無量の佛に於て

深妙の道を行せずして

衆苦に惱亂せらるゝには

是が爲に涅槃を説き

たまふ

(鈍根樂小法 貪著於生死 於諸無量佛 不行深妙道 衆苦所惱亂 爲是説涅槃)

「鈍根にして」心の氣根が悪くて「小法を樂ひ」

十、優陀那——自説 十一、毘佛略——方廣
十二、和伽羅那——授記

この三つのものを合せて十二となるのであります。大乘の經典、殊に法華經のやうな、お釋迦様のお心持を出来るだけ有體に説いてあるお經——先刻申すやうに言葉では説き盡せないのでありますけれども、説き盡せないと申しても、許す限り言葉や文字で出来るだけ佛のお心持を有體に説かれた、さういふ經典に於ては、前の九つだけでなく、斯ういふことが加はつて來て居る。

「優陀那」「自説」これは佛が説かれる、人が聽かないでも説く。聽かないのに説くといふことはどういふことかといへば、初めは聽かないのに話しても向ふが注意しない、だから初めは聽いた事だけ返事をしてやる、向ふに疑問があれば、その疑問に對して教を與へて、又疑問が起ればその疑問に對して教を説いてやるといふやうにしてだん／＼教へて行く

それからモク相當に機根が進んで来れば、今度は向ふが疑問を起さないでも、佛様御自身の方から進んで教を説かれる、それが自説であります。人間が本當に解らないと、解らないとも気が付かないもので、人間といふものは大概その人の力だけしか出来ない、私共も學校駈出しの當座は英語や獨逸語などを教へて居りました、その時分に教科書を讀んで、どうもこの所は自分でよく解らぬ、「何だか自分でよく解らないのだが、こゝの所を聴かれると困る」と思ひながらビク／＼して教室へ出て講義をする。さうすると決して困らない、こつちの解らないところは生徒は聴きはしない、生徒は生徒の力相當の事を聴くから、それはこちらではサツサと返事が出来る、解らぬところは決して聴きはしない。それで終ひには圖々しくなつて「こんな事は聴きはしない」と安心するやうになつたのであります、やはり人間は本當に解らぬ事は解らぬとも気が付かぬ、解ら

ぬと氣の付いた事は幾らか解りかけて居る事が、半分解らないから解らないと氣が付く、まるで見當の付かぬ事は解らぬとも思はない。それだから大勢の人間が疑問を起したから、その疑問に對して説くといふのでは、佛の覺りの全體は説けない。だから凡夫の思ひ掛けないところまでも、佛は相當にみな力が附けば打明けて説かれるのである、それが自説です。大乘の經典に入つてだん／＼深入して来ますと、いつでも自説といつてみな思ひがけない事を佛が言はれる、言はれて見てビツクリする、「成程そんなことがあるかな」といふやうになつて来る。それから、「毘佛略」「方廣」といふのは「方」は正しいといふこと、「廣」は廣いといふこと、これは一體如何なる人間でも必ず覺りに入れるものだといふことを打明けて説かれる、それが方廣であります。初めは教の順序としては信心をする者は濟はれる。信心をしない者は濟はれない、善い行をして

居る者は佛に近いのであつて、惡い行をして居る者は遠いのであるといふやうに説いて居る。これは方便としてはそれでも宜しい。だん／＼さういふやうに説いて行つて、一番終ひになると濟はれない者は無いぞとなつて来る。佛に縁の無い者はないぞとなつて来る。チヨット今までは違ふやうなことになるのですが、それが本當の方廣です。善人ばかりが濟はれるのぢやない、惡人でも濟はれるのだ、信心する者ばかりがえらいのぢやない、信心しない人間でもその心の奥の奥を探して行けば、やはり佛に近いところがある、まるで縁が離れた者は一人もないのだといふことを説いて參りました、要するに佛の教に依つて濟はれない者は一人もないのだぞといふことを打明けられる、これは大乘の經典で初めて言はれる事でありませう。初めからそんな事を言ふと、「人間が怠けて居つても濟はれるなら勉強するのは損だ」といふやうな心持になるから、初めはそんな

事はいはない。「信心すれば宜い、勉強すれば宜い」と言つて、一番終ひに「イヤ勉強しないで済はれるのだぞ」となつて来る、それが一番本當の事ですよ。それから「和伽羅那」「授記」は、佛になるぞといふことを約束される、お前は未來に於て今のお前の心の持ち方が違はないならば、必ず今にだん／＼修行を積んで行つて、結局佛と同じものになるぞといふことを約束される、それが授記であります。そこで授記には必ず條件が付いて居るといふことを考へて置かなければいけない。これはあとから本文を讀んで見ますと判りますが、佛様はたゞ授記しやしない、「お前が今の心持を改めないでこれからだんだん修行して、追々佛の道を學んで大勢の人間を濟ふために力を盡して、努力に努力を重ねて行くならば、必ず佛と同じところになるぞ」といふ、この條件が必ず付いて居る、その條件なしに授記はありはしない。ところがその條件がなかく／＼難かしい、容

易な事では佛に成れやしない。だから後世になるとそんな條件など振廻して居るとみなが億劫がるから『法華經を讀みさへすればみな一足飛びに佛になるぞ』といふやうなことを言つて居る、そんな事はどこにもありはしない。『法華經を讀んで居れば直ぐ佛になる』そんな事はお經の中に一ヶ所も書いてありはしない。しかしそんな事をいつて居ると信者が寄付かないから、商賣になるとそんな事は言はない。『これは即身成佛の道である、法華經を讀んで居りさへすれば佛になつてしまふ』といふ。しかしながら授記はそんな簡單なものぢやない、今の心持に付て見込を話されるのです、『お前は西を向いて居るぞ』『お前は東を向いて居るぞ』といふことだけのことである、たゞ方向をいふのです。『お前は東を向いて居るから、その方向を變へないで眞直ぐに行つたら東京に行くだらう』『お前は西を向いて居るから、その方向を變へないで眞直ぐに行つたら京都

(我説是方便、令得入佛慧) 未だ曾説汝等當得入佛道也

そこで方便を設けていろ／＼に説いて居るのは、その説いた事だけで満足させるつもりではなかつたのだ、さういふ教を説いて、だん／＼深入りして、結局佛の具へて居る智慧を具へられるやうな、その道に入らせたのだ、『佛慧に入ることを得しむ』佛の智慧を具へるやうな道に入らせるために低い教を説いたのだ、だから低い教で満足してしまつてはいけない。初めに於ては未だ曾て汝等は當に佛道を成ずることを得べしとは言はなかつた、たゞ迷がなくなるぞ、苦みがなくなるぞ、世間の人間と違つて、あさましい生活をしないで居られるぞといふことばかりを教へられた、眞に佛と同じになれるぞといふことは初めには言はなかつた、所謂授記しなかつた何故いふなかつたか。

未だ曾て説かざる所以は 説時未だ至らざるが

へ行くだらう』斯ういふのであつて『眞直ぐに行つたら』といふ條件が付いて居る。それを考へないで『お前は東へ向いて居るから、東京はすぐそこだ』『お前は西へ向いて居るから、京都はすぐそこだ』といふのは大變な間違であります。兎に角さういふやうに努力を積んで行きさへすれば、必ず佛の境界に行けるぞといふことまでも打明けて許されるといふこと、これは大乘の經典に於て初めてあることでもあります。

そこでさういふやうなことをこゝにズツと説いて參つて、先づ卑しい心持で眼の前の事ばかりを考へて居る者があるから、さういふ人間のためには、『涅槃』といふこれは本當の涅槃ではありませんが、苦みや、惱を除いた一通りの道を説いてやつた。

我是の方便を設けて 佛慧に入ることを得しむ 未だ曾て汝等 當に佛道を成ずることを得べしと説かず

今正しく是れ其の時なり 故なり 決定して大乘を説く (所以未會説一 説時未至故 今正是其時 決定説大乘)

何故かといへば、説く時未だ至らざりしが故である、何故未だ説く時が來なかつたかといへば、突然佛の境界に行けるぞと言つたら、それはまるで段が違ふから、説くべき時が來なかつたから言はなかつた。『今正しく其の時なり』今は四十何年の説法を終つて、説くべき事は一通り説いたから、今度は本當の事を打明ける時が來た。そこで『決定して大乘を説く』自分の心持を思ひ定めて、大乘即ちお前達は佛の境界に近づくまで決して努力を止めるなどいふ教を説くのである。

我が此の九部の法は 衆生に隨順して説く 大乘に入るに爲れ本なり 故を以て是の經を説く (我此九部法 隨順衆生説 入大乘爲本 以故説是經)

この九部の法は人間の機根や、人間の力に應じてマアこの程度で宜からうと思つて説いたのである。「大乘に入るに爲れ本なり」大乘の教に入るには、それが根本といふ意味ではない、初めといふ意味である。そこから手がかりをつけてだん／＼大乘に入らなければいけないのだ、故を以て漸次説いて來て而して結局今この教を説く。

「本」といふ字は、根本といふ意味に使つて居る所もありますし、それから初めといふ意味に使つて居る所もある。この所では初めといふ意味に使つて居る。「大學」に「其の本亂れて而して未治まるものは否じ」とある、その本末もさうです。親に孝行をするといふことをしないでは、天下の爲に力を盡せぬといふ、先づ手近い所からやれ、親に孝行し、兄弟仲良くすることをやつて居る人間が、國を亂すことではないぞといふことを孔子もいつて居られますが、それは根本といふ意味でなくて、やはり初めと

チツトモ卑しい事はない、嘘をつかないといふことは良い道徳です、生物の命を取らぬといふことも良い道徳です、盗みをしなないといふことも良い道徳です。それを卑むといふことは少しもない。たゞそこだけで止まれば大きな働きが出来ないから、それではいけないといふだけの話です。「大乘に入るに爲れ本なり」低い方からやつて行け、けれどもその低い方だけで止つてはいけないから、今度は本當にお前は佛とも成れるのだから、その佛に成るまでは努力を止めるな、斯ういふことを教へるのであります。大乘といふことは何を教へるかといへば、大心を養ふことです。大心といふのは何であるか、大心といふのは佛に成らうといふ心です。王様になつたところで、王様が支配する國土は限りがある。大金持になつてその有つて居る金が何億、何十億と積んで、やはり何億、何十億といふ限りがある。しかし佛が濟ふといふ時になれば、佛の教は限りがない。

いふ意味です。それからつまり天下に及ばず「本」といふ字は二種に使ふ。これも「大乘に入るに爲れ本なり」大乘の教に入るには、この小乗の法の自分の行を慎むとか、嘘をつくな、盗みをするな、人に亂暴な言葉を吐くなといふそこから初めてだん／＼大乘に入つて行くのだ、斯ういふのであります。

この言葉は、私は法華經を信する人、日蓮宗なり法華宗の人は餘程氣を付けて讀まなければならぬと思ふ。「大乘に入るに爲れ本なり」と佛様が仰しやる煩惱を除いて、嘘をつかない、盗みをしなない、人に不親切をしなないといふことが手初めである、それから大乘に入つて行くのであるとハッキリ斷つてあるのですから、「佛を信じさへすれば、酔つぱらつて喧嘩をしても構はぬなどといふのはまるでお釋迦様の精神とは違ふことであります。小乗の教を卑むといふことは、小乗の教が悪いのぢやない、そこで止つてしまふから悪いのであつて、小乗の教その物は

何十萬年、何百萬年かゝつても佛の教は變らない。それだから佛に成らうといふほど大きい心は無いのであつて、その佛に成ることが出来るか語合つて下さつたのであるから、吾々は努力してそこに行けば宜いわけです。その大心を養ふことが、それが大乘です。その大心を持ち続ける者、それが「大士」です、菩薩摩訶薩といふ、所謂「摩訶」といふのがそれです、大きな心持を持つて居る者、大乘と小乗の區別といふものは、ギリ／＼の所まで押しつめて行けばそこに成る。佛に成るまでは怠けまい、今の自分分は凡夫だが、佛に成るまではどんな事があつても努力を止めまいといふ、その心持を持つて居るといふことは人間としてこれほど大きい心持は無いのでありますから、それが大乘であるといはれる。低い方から説いて行くけれども、その低い方を本にしてそれを手初めとして、さうして結局大乘に入る。佛と同じに成るやうな心持を有つといふのであります

これまでの「我是の方便を設けて」といふところから、「故を以つて是の經を説く」といふまでのところは、理は一つだといふことを言つてあります。この方便品の中に「一だといふことが四つあります。こゝに昔から『四一開會』といふ言葉をいつてあります。一つといふことを四種に説いて居る。道理は一つである、人間も結局一つになる、佛様の心持も一つである、修行の方法も結局一つに歸着するといふやうに、一つになるといふことが四つ説いてあります。その四つの一つになるといふことを説いて、而して開會する開といふのは、物を解剖する、細かに分けて解釋する、會といふのはその中の意味をスツカリ解らせること、それが開會でありませす。例を言ふならば、一つの會社がある、その會社に専務が居る、理事が居る、取締役が居る、支配人が居る、使用人が居る、小僧が居る、みな仕事が違う。その小僧に「お前は何で仕事をして居るか」「俺は小僧

事、低い仕事、いろ／＼ありますけれども、みなこれは國家の安寧のため、幸福のために役に立つて居る、人類の幸福のために役に立つて居る。どの仕事でもすべて小さい仕事はない、よく考へればみな尊い仕事である、さういふやうに行けばみな活きて來るのであります。法華は要するにそれナンです。今までの四十年の説法といふものは斯ういふ意味であつた、お前達が小乗の教や、大乘の教や、いろいろの教の修行したのは斯ういふ意味だといふ、その意味をよく分解して、それを會得させやう、斯ういふのが所謂開會の思想であります。之れを四つの點から申すのであります、今讀んだところが「理一」であります。道理は一つだ佛の教が浅いのも、深いのもあるけれども、結局一つの最後の眞理を明にするためにやつたので、それはいろいろな方便、いろ／＼な方法を用ひて居るけれども、だん／＼深入りして行つて、一番終ひにはその

に雇はれたから自分の仕事をやつて居るのだ、月給十五圓貰ふから十五圓の仕事をして居るのだ」その支配人に「お前は何で仕事をして居るか」「俺は支配人の役目を持たされたから仕事をして居る、月給三百圓貰ふから三百圓の仕事をするのだ」斯ういふやうに思ふのは、それはつまらない事でせう。だから開會しなければいけない、その仕事の性質を細かに分解して教へてやる、小僧が使に行くのも、支配人が帳面をつけるのも、それはこの會社の事業を完全にするためである、だから小僧が使に行くのもこの事業の役に立つて居る、支配人が帳面をつけるのもこの事業の役に立つのだから、つまらない仕事といふものは一つもないのだ、みな値打のある仕事だと解らせるといふことが所謂開會です。その一切の仕事分解して明にして、その意味を會得させる、それが大事ナンです。私はこの開會といふ思想が非常に大事だと思ふ。國家などでもその通り、高い仕

佛の教を信じ、自らこれを身に行うて行つて、そこで初めて「成ほど、こゝだナ」といふことが解るだらう、斯ういふことを説かれました。それから今度は「人一」といつて、人間はいろ／＼な人間があるけれども、その人間の行といふものが結局一つに歸着するといふことを次に説かれるのであります。

(第二十二講了)



比叡山上宗教教育講習會の記

河合 陟 明

我國の教育、宗教、學術、政治、經濟、軍事等、各方面の名士を以て組織せる日本興國同盟及び大學教授等を以て主眼とせる教化振興會の兩者主催となつて、第二回宗教教育夏季講習會なるものが、千古の靈峯比叡山延暦寺に於て開催せらるゝ事となつた。蓋し明治維新以來久しく宗教を閑却視し來つて、我國民の人類普遍的根柢本欲求たる心靈的源泉を枯涸せしめ、深遠の思想崇高の情操雄大の氣魄を去つて、宇宙大の自己、法界人の大自覺を失ひ、穢弊迷に國家社會のあらゆる方面に迸出するに至るや、夙に先覺者によりて宗教信仰の必要が叫ばれ、今上の聖天子また御即位の詔勅に於て『天業經綸』の根本として『内は教化を醇厚にして民心の和會を致し』と宣はせられ、文部省また一般教育に當接教育はた宗教訓練の必要を認むるに至り、教育界に於ては目下類に之が實施を論ぜられる時に當り、此方面の先輩たる上記の二團體が、多年活動の結果に鑑み、夏季講習會を昨年第一回は富士山麓御殿場に、今年は靈峯に、『神佛基督教教育講習會』と銘打つて八月一日より七日まで開催せらるゝに至り、各々新界の名士を聘して講せらるゝ事となつた。予は其分に當るべき者ではないが、會々二主催團體の各理事長として尋知の間なる陸軍中將井上一次閣下及び京大名譽教授青柳榮司博士よりして佛教方面の代表として出席を登進せられ、不敏ながら聯が大法光顯の爲に快諾之に加はる事となつた。講習生三百五十餘名

は殆ど皆日本全國乃至遠くは上海等よりも來れる教育者にして、師範、中學、女學、商業、工業、小學校、青年學校等各教員、尙ほ大學、高等、高等師範、高工、商船等の或は教授、或は學生、及び一般社會人も交つてゐた。内容は左の如きものである。(午前は八時より十一時半、午後は一時より三時乃至五時、夜は七時より九時乃至十時である。)因みに夏季には全國各地に種々の講習會が催されるが『文部省後援』なりし所のものは唯此の一つのみであつた。

一日午前 開會の辭 國際日本の現状と覺悟

日本興國同盟理事長 陸軍中將 井上 一次

教育と信仰

前京大總長 文學博士 小西 重直

午後 延暦寺の歴史的觀察

延暦寺座主代理 橋本 正 田村 徳海

夜 法華經の精神と日蓮聖人

統一團講師 河合 陟明

二日午前 佛教の眞理内容

京大教授 文學博士 羽 深了 詔成

午後 物質文明と宗教

大日本紡績取締役 松村 詔成

夜 選舉肅正と信仰

前大阪辯護士會長 禁酒同盟理事 林 龍太郎

座談會

三日午前 天皇機關説と本末論

京大名譽教授 法學博士 中 島 玉吉

神道の眞髓と國民教化

上賀茂神社宮司 山田 新一郎

午後 徳育上より見たる佛教

前京大教授 理學士 石川 成章

夜 瑞穂國本位の生活

前京大病院長 醫學博士 松浦 有志太郎

茶話會

四日午前 大楠公と信仰

教化振興會理事 京大名譽教授 工學博士 青 柳 榮司

教育行政に於ける二三の問題

文部省普通學務課長 堀 池 英一

午後 入信の経路に就て

前東北帝大總長 工學博士 井上 仁吉

六日午前 國民教育に於ける日本精神

前廣島文理科大學長 川村 多實二

午後 佛教文學に表はれたる人間性

京大教授 文學博士 本 田 義英

夜 日本精神に就て

京大教授 文學博士 山 本 一清

夜 日本精神に就て

東京文理大教授 文學博士 中山 久四郎

儒教の範圍及び目的

京大名譽教授 文學博士 高瀬 武次郎

夜 日本精神に就て

精神教育會長 同志社大學教授 加藤 尺堂

五日午前 基督教の修養法に就て

同志社大學教授 日 野 眞澄

午後 基督教の神國思想

同志社大學教授 大塚 節治

歴史上より觀たる比叡山

京大歴史學教室 文學士 時野 谷 勝

夜 鳥の聲を聞く座談會

京大教授 理學士 川村 多實二

七日午前 世界に於ける思想界の趨勢

朝日新聞副社長 法学博士 下村 宏

教化振興會理事長 京大名譽教授 青柳 榮 司

予は是の如く開講の日の夜二時間半に亘り、先づ佛敎の教理體系を講じて法華經の大統一的思想に至り、進んで其の一佛一王の教旨に據れる日蓮聖人の痛烈淋漓たる尊皇愛國の大義名分の大主張を叫ぶに至つては全く熱火の辯を揮つた。予は聽衆を忘れ我を忘れ講演そのものをも忘れ、唯々至誠に終始せる白熱的信仰の胸中を流露したのである。予の言は多くの聽衆に深き感激を興へしと見え、講習會中朝も晝も夜も食事時も入浴時も排尿時も、正講義以外の時間殆んど休みなく誰人かに神儒佛基四者の間に起る種々なる不審疑問を解釋し又解決し徹底的力戰健闘を續けた。會を終へて八日予は獨り横河の定光院にそのかみ日蓮大士が十有二年間求道修習途に大法弘通國國民の悲壯崇高なる一大覺悟を懷いて比叡を下らんとする時の英姿風爽否々實に美姿と言はんより勇氣と言はんより慈悲の眼差し慈悲のかんばせなつかしき限りなき銅像を見、熱淚滂沱感慨窮り無く、そむる七百年の往時を憶びながら、歸途の山中深渺無限はてしなき行方も知らぬ本佛の大慈悲に我と我胸をかき抱きつゝおもむるに此の靈峯を下り行いたのであつた。歸東の後希望の士に懇るなる勸信の手紙を添へて拙著『皇道と日蓮主義』數十部を贈り、一々

かべながら伏して先生の御健康御健闘をお祈りいたします。 昭和十年八月十日 牧 野 徳 一

拜啓 河合 隆明 先生

貴輪並に書齋當に拜受任り厚く御禮申上候 小生今日まで幾多の會合に出席任り御話を聞き候ひしも今回天下の靈地叡山に於て行はれたる宗教講習會程深き感銘を受候事未だ之無く候 科學萬能の世に處して物質の尊きを目撃するも其の精神の尊きを眞に知り得ざりし私に一大衝擊を興へたるものにして久しく求めて未だ得ざりしものを遂に得たるの感切々として致し喜び之に過ぎるもの之無く候 天下諸名士の温容に接し餐食を共にし其の高ぶらざる其の駕らざる御生活を目撃致し感激實に深く殊に其の宗教的信仰の御話を聞くや言々句々肺腑に徹するもの之有候 又四百會友の熱誠最親愛なる態度は永く記憶に残るものに候 報ひられざる社會状況に不平を抱き情氣漸く亮し要領第一主義を以て處世の訣かと誤信せんとせし我が心の巧利的深淵を擊碎し忽然として一大光明と進路とを興へ候 皇國日本の男子と生れたる身の幸福を思ひ 信仰に生きる人の如何に榮しく如何に花々しく如何に意義あるかを覺り神佛の廣大無邊なる慈悲心高有の恩恵を感じそれに對する報恩謝徳の念隆々として萌し候 殊に先生の信仰たるや佛子の名に背かず一言すてに世を掩ひ人を壓するの氣概! 其の博學と能辯もさることながらその信仰より出でたる熱心力こそげに私の三教久しく景仰おく能はざる所に候 先生の此の熱心力を以てせば何物か之をさへざるを得ん 何物か大

是に經文と祖判と自詠の歌とを記して署名したのである。而して今左に掲ぐるは同感の君子淑女より寄せ來られし數多なる書翰の一部である。予がものせし自詠の歌に云く、

我が魂の滴りをこそ此の書に留め置きけれ君な忘れそ

ひたぶるの眞心をもて君讀まばみ佛いかに恵みたまはれ

あ、予この講習會に於て、聊か佛子の本分を揚して佛國の御前に答へ奉る!

されば願つて省みる時尙々ぞひ説くべき事いさゝ多かりしに説くをも得ざりしを思ひては、たゞ暗然として大法の御前に君國の御前に涙を吞む……………あ……………

世尊よ 我が至らざりし所を救し給へ

南無妙法蓮華經

秋立ちて水洞れ池の曳蓮の紫の花咲き出でにけり

先生涼しくなつて参りました。京のあたりの古蹟を訪れて本日故郷の家に歸つて参りました。

比叡のお山に於ていろ／＼の御教をいたゞいて有難う御座いました。單に佛講義に感佩させていたゞいたと言ふよりも眞理の探究のため將また國を愛する眞情の程々として自ら體現せさせ給ふた先生の御態度に感激させて頂きました。

些の妥協も許さず烈々として正義を主張したまふその方を私は自らの中に省みてその貧しきを悔ひます。小さい自らの便宜と肉身の安穩のためにすつかり妥協的になつてゐる自らを恥かしく思ひます。

比叡の夜の講堂に義を叫び正を祈りたまひしその御姿を今思ひや

成せざらん 昭和維新たる今日皇道日本の要求する士は此の強き信仰を基礎に生きる熱血氣魄の壯年ならずして誰ぞ嗚呼かゝる士の輩出するもき大日本帝國の隆々たる伸長期して待つべく神國日本の御威威煥然として宇大を壓せん 其上立正安國論を眞向に振り廻し身命をなげうちて國難に處し侃々語々として尊王愛國を絶叫して止まざりし日蓮上人 近くは烈々たる大和魂を以て明治維新大業の先驅をなせる吉田松陰の氣概を思ふ時實に感愧無量に御座候 辭かに眼を閉するに先生の尊容眼前に覺察として去來し御教旨今尙確然として私に胸裡に在り 先生が言に『あゝ國亂れて忠臣現れ時艱にして偉人を思ふ……………も昭和今日の危局に際して日蓮聖人の大精神を繼ぎ立正安國の大誓願を行ぜんとするものは果して誰ぞ!』と。願はくば御自愛御研鑽益々御奮闘社會の大導師たられん事神かけて祈上候 今や先生の著に接し金言を頂きぬ全二百三十五頁一語一語として尊き愛國の熱情と深き崇佛の信念より出でざるは無く筆陣鏖戦淋漓激瀉肺腑を切り骨髄を刺す 三讀四讀以て先生の意の在るところを知り聖人の大精神を憶び以て己が一生の目標となし毅力ながら刻苦精勵社會の一角に貢献せんと思ふ次第に候 淺學非才若年の一小學教師なれど此の記念的講習に出席し今又先生の著書に接し感激おく能はず非禮損文をかもへりなす致て一書を奉せし所以に御座候 先生の御厚情を謝し國家の爲め御壯健御奮闘の程重ねて御祈り申上候 敬具

八月廿三日 河合 隆明 先生

會館の改造 さゝやかな本會館の講堂をして無言の裡に何等か宗教の氣分を、入つて来たばかりで發心せしめ得る設備が必要ではあるまいかと苦心の結果、講堂に新たに御本尊を奉安することに決し、八月の初より九月の中旬までかゝつて漸く落慶することを得た。仄閑する處に依れば千代田高等女學校でも今度講堂に 佛像を安置されたといふ。洵に結構のことに惟ふ。

大帝都に於て清浄な心の慰安所が欲しいといふことは相當要求されて居る。本講堂にはそれが單なる物欲生欲の取引信心でなく、純なる祈らざる感謝報恩の道場として何誰でも何時でも隨時に禮拜さるゝやうに、而して無言の裡に便宜出入されてよい鹽梅になつて居る。猶ほ進んで應答を希望さるゝ方には隨意に二階に昇り、又本多上人の著書も現場に於ては閲覧が自由ですから、求道の士女は御遠慮なく御出かけなさるゝがよろしい。

震災追悼會 九月一日生憎の雨天の折柄午後七時より、梶木、和賀、釋、山口等の諸師に依つて關東大震災の第十三回忌追悼法要が

華經大講座として毎月一冊發發行の大々的宣傳をなされつゝあるその出處は、實にこの毎木曜晩のお話からである。書物に倚るも無論結構であるが、直接に先生の御人格に接することが最も肝要と思ふ、お誘合せての御來臨を待つ。

因に數日前ある會の一婦人から、是寺とも拜聴にお伺ひ致したいのですが、行くことが知れると周知が面倒だし、殊に或る人から説まれるのが嫌なものですから實に惜しいのですが、せめて本でもといふお話し。全く驚きました、第三者は何と之を批判されませうか……實に御同情に堪えない。

要は斯の一字あるのみ！

北海道視察 八月十四日午後七時上野驛發で磯部常任理事は、日生上人御令息禮三氏と同道して北見國歌登方面迄出張した。別に阿寒國立公園の時も、定山溪温泉の景も賞づる暇なく、車中や停車場に假睡しつゝ、旭川、札幌等を經て青函海峡を再び横断し、歸途青森盛岡、福島等を經て廿一日午後五時歸京。

この旅行は北海道一部の地形風物を採り、移住者の宗教情操其他ある必要な視察が目的

町會長山本又四郎氏はこの記憶すべき大災厄も青少年の方々は其の味を識らざれば、今晩の各位のお話を牢記し、又夫々傳へ語るやうにとの注意があり。小石川區長も臨席する筈であつたが、恰度區主催の震災記念の會と同刻である爲め庶務課長荒牧太郎氏よりこの追悼會の二大意義を語られた、即ち一は罹災者の追善供養の大切なこと、一は復興事業の益々完備すべき責任に就て謙々有益なお話があり。續いて陸軍少將長谷川正道閣下より『科學戰と思想戰』と題して興味ある幾多啓蒙さるゝよい講演を約一時間半に亘つて辨ぜられ。最後に小林一郎先生は『人生と死』といふことに就て談笑のうちに極めて深遠な教理を含めた名説が演ぜられ、閉會も惜しまれたが定刻十時となつたので之を結ばれた。

因に當夜來會者一同へ、野村海軍大將官、非常時と我が國防』一部實施本した。

日蓮聖人の大悲の巨羅月に際して、お互門下の者は衷心から謝恩の誠を捧ぐべく、九月十五日の午後二時より小西日喜、

和賀義見兩師により法味を供へ、續いて中村清一氏の『龍の日の日蓮聖人』と題する感慨深いお話し。次に奉納琵琶『龍口法難』を松本錦子女史に依つて謡はれ。小唄後、小西師より『信の聖人』が謙々數千言、多大の感激を聽衆に與へられた。そこへ關口錦華女史より更に『法難法』琵琶が奉納され、秋の日足の早くも點燈の頃一同は『おはぎ』の御供養に預り、お互感謝しつゝお別れした。

横濱 教誌

七月三日 磯子町大内氏のなき御子さんの第七七忌法要を、同氏方にて午後一時より催す。磯部先生始め有志參集す。

同 廿三日 磯子町大内氏の本光院日曜嬰子靈位の日々日忌磯部先生始め會員十餘名參集唱題回向す。後、磯部先生の御法話。

二本 松報

七月三日、同四日 第六回宮城控訴院管内司法保護事業研究会總會を山形市縣會議事堂に開催す因つて安達傳教慈善會保護主任として出席す。

同 十八日 午後一時五十七分、二本松縣
通過にて戦死者遺骨八基故郷に歸る、因つて
高迎讃經す。

福島支部報

九月十三日(金) 午後二時半より生徒集
會所にて高商例會、今回より多少繼續的に河
合先生の法華經御講話を回顧することにした
からりと晴れた雨上りに微風戦ぎ、先生の快
辨と相俟つて真に法悦に満たされた。

同 夜、大町、中村様方に支部例會、龍
ノ口法華及星下りの日に因んで、佐渡御書及
諸法寶相鈔の御講義、眞に懐しい集りであつ
た。

寄附金維持及團費誌料領收

(自八月二十一日
至九月二十日)

一金貳圓貳拾錢也	千葉縣 廣部 乾山殿	一金壹圓也	大阪 藤原 道子殿
一金參圓也	東京 宇野 博順殿	一金壹圓也	東京 深澤 紀文殿
一金壹圓貳拾錢也	大阪府 深田 萬壽徳殿	一金貳圓五拾錢也	横濱 長久保 徳太郎殿
一金壹圓貳拾錢也	山形縣 村田 義本殿	一金五拾圓也	東京 阿 某 殿
一金壹圓貳拾錢也	東京 本郷 宮次郎殿	一金參圓也	同 金指 龜吉殿
一金五圓也	同 北條 平太郎殿	一金拾圓也	市川 立正 會殿
一金貳圓貳拾錢也	愛知縣 戸松 あさ殿	一金貳圓五拾錢也	東京 増子 西治殿
一金貳圓五拾錢也	福島 金澤 利江殿	一金貳拾圓也	同 柴田 武治殿
一金五圓也	東京 井上 知孝殿	一金貳圓貳拾錢也	京都 久城 勝三郎殿
一金貳圓也	小倉 齋藤 又治郎殿	一金貳圓貳拾錢也	東京 芳村 伊四吉殿
一金貳圓也	東京 濱中 治三郎殿	一金貳圓貳拾錢也	大阪 上田 豊二殿
一金貳圓貳拾錢也	福井縣 宮川 日見殿	一金貳圓貳拾錢也	同 山乃 神傳 道開殿
一金貳圓五拾錢也	東京 高橋 福一郎殿	一金六拾錢也	東京 沼部 彌太郎殿
一金貳圓五拾錢也	東京 城谷 昌安殿	一金貳圓也	東京 淵 穴山 新之助殿
一金貳圓五拾錢也	同 佐藤 大太郎殿	一金貳圓五拾錢也	愛知縣 藤田 清太郎殿
一金貳圓貳拾錢也	同 鈴鹿 直三殿	一金貳圓五拾錢也	
一金貳拾圓也	同 井上 道太郎殿	一金貳圓五拾錢也	
一金貳圓貳拾錢也	岡山縣 岡野 コキヨ殿	一金貳圓五拾錢也	
一金壹圓貳拾錢也	萩 小野 ツネ子殿		

右難有入帳仕候也

財團法人統一團會計

新修 略註 白蓮聖人遺文集

清水龍山

守屋貫教 鈴木一成

中谷良英 榊原久遠

共編

内容見本呈上

再版 改訂

科段 別註 御遺文百廿余編(脚註入)

御義口傳 御講聞書 妙行要文集 一日一訓 聖語字解

体裁 裝幀

巻頭挿入タリムアト寫眞版七葉 四六版 縦六寸二分 横三寸五分

紙數 千百十四頁

特製 總 皮 三方金

並製 總タロニス 天金

函入最上美本

定價 特製 三圓八十錢 並製 二圓八十錢

送料 廿一錢

東京市日本橋區江戸橋二ノ六(明正ビル)

發行所

久遠閣

電話日本橋 三二一七番 橋本七座東京 七二八〇六番

お待ちかねの

法華經の心髓

本多日生上人
菊半載四百頁美本
定價金壹圓五拾錢
郵送料 金八錢

大正六年秋彼岸會の中日に出版された本書は其後久しく絶版となつて、各方面からの御要求を満たすことが出来ませんでした。爾來十數年後の矢張り秋の彼岸會に改版して皆様の前に出ることには大因縁とも申すべきでしょう。敏。

講述極めて平易ですから初心の方にも大に歡迎されつゝあります。今更内容の照會もありませんまいから、此機會に是非御清覽をお薦め申上ます。

發行所

東京市四谷區内藤町一香地
電話四谷七七五番
振替口座東京六二二番

晋文館

取次所

東京市小石川區音羽町六ノ十七
電話牛込五三三六番 財團統一團
振替口座東京九四二〇番

團員無料診断

本團員にして醫師の診察を求めらるる場合は、御希望に依り、京橋區内の診療所に於て、熱誠なる特志博士の菩薩行として、無料診断を開始されましたから、御遠慮なく隨時、本部に御申出下さい。

診察時間 毎日(日曜、祭日を除く)午前十時より午後三時までとす。

財團統一團
電話牛込五三三六番

本多日生上人著書特價提供

聖語錄	改訂版	特價	金壹圓八拾錢
法華經要義	賜天覽	全	金貳圓五拾錢
日蓮主義心髓		全	金壹圓五拾錢
日蓮主義精要		全	金貳圓九拾錢
佛教の本質と其價值		全	金貳拾五錢
法華經要品		全	金五拾錢
日生上人レコード		全	金參圓廿五錢
日蓮聖人		全	金拾錢

河合彰明著
皇道と日蓮主義

本多日生上人
勳行作法

定價 金壹圓
郵送料 金壹圓

月刊「教」誌

申込所

東京市小石川區音羽町六ノ一七

定價一冊 金壹圓貳拾錢
送一年前金 金壹圓貳拾錢
郵送料共

東京市小石川區音羽町六ノ一七

財團統一團出版部

振替東京九四二〇番

統一團定價
一冊 金貳拾錢 送料壹錢
半々年 金壹圓貳拾錢 送料共
一ヶ年 金貳圓貳拾錢 送料共

注意
▲御申込ハ總テ前金ノ事
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可
▲御轉居ノ場合ハ必ず新高共直ニ御通知ノ事

昭和十年九月廿四日 印刷納本
昭和十年十月一日 發行
(第四百八十七號)

不許複製

東京市小石川區音羽町六ノ一七
編輯兼 發行所 磯部 滿 事
印刷人 大辻 松太郎
東京市品川區南品川二ノ一八一
印刷所 都印刷所
電話葛輪六〇二四番

發行所 財團法人統一團
東京市小石川區音羽町六丁目一七
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番

目 次

本 尊 論 (後篇)	聖應院日生
續日本精神運動の先證	和賀義見
法華經講話 (第二十三講)	小林一郎
記事	
○本部團體各地教信	
○寄附維持金隨費誌料領收	

第十四年十一月號



統

統
一
團
發
行